

## 幕末福井藩における武術修行

— 「御家中武術免状受候面々取調書」の分析を通して—

長野 栄俊\*

はじめに

1. 福井藩における武術の流派
2. 「御家中武術免状受候面々取調書」
3. 分析と考察

おわりに

### はじめに

福井藩公認の武術（武芸）には、鎗術・兵学・居合・剣術・柔術・弓術・炮術・馬術の8種があった。各種目には藩から2人以上の師役（師範）が任じられ、藩士は師役の屋敷地内に置かれた稽古所に通って流儀の指南を受けた（ただし、馬術師範は「御馬方」と呼ばれ、稽古は馬場で行われた）。

手当金の下賜などはあったものの、稽古所での「弟子引立方之儀」は基本的に各師役に任せられていた。しかし、安政4年（1857）9月、藩校改革の一環として明道館敷地内に惣武芸所が置かれ、師役の稽古所がここに集約されたことで、武芸稽古は初めて藩の直接的な監督下に置かれることになる。

そのためここに至るまでの師家道場での武術修行の実態については不分明なところが多い。例えば、稽古所はどの程度の広さだったのか、また各流派にはどの程度の門人がいたのか、家格・身分によって入門する流派に違いはあったのか、あるいは親子兄弟で異なる流派に入門する例はあったのか、さらには各流派に免状（印可）を受けた者はどの程度いたのかなど、福井藩についてはそのほとんどが明らかにされていない。

そこで本稿では、これらの問いに一定の回答を与えてくれる資料として、嘉永2年（1849）の年紀を持つ「御家中武術免状受候面々取調書」（松平文庫〈福井県文書館保管〉A0143-02479-012。以下「取調書」と略す）を取り上げる。武術免状の取得状況の分析を通じて、幕末における福井藩士の武術修行の実像の一端を明らかにすることが目的である。

以下、特に断らないかぎり、資料は松平文庫のものを用いる（文書館の資料群番号 A0143）。また、基本的に「炮術」と「鎗術」の語を用いるが、資料からの引用等で「砲術」「槍術」「鎗」の語も併用している。

---

\*福井県文書館主任

## 1. 福井藩における武術の流派

幕末期の状況を理解する前提として、まずは福井藩の武術の流派を概観するところから始めたい。

### (1) 研究史と問題点

同藩の武術に関して最初にまとめた記載を持ったのは、大正2年(1913)「福井新聞」の連載記事「武道師範家列伝(一～七)」(a)である<sup>1)</sup>。同紙記者の森恒救<sup>つねのり</sup>が「藩へ提出の流儀伝来由緒書」を典拠として、弓術7家、馬術6家、鎗術4家、剣術3家、居合2家、柔術2家、炮術4家、兵学2家の師役を取り上げたものである。

ついで昭和16年(1941)刊『稿本福井市史 下巻』(b)では、主に幕末期成立の史書『続片聾記』を典拠にして、各師役家の出仕時期や歴代当主の履歴などが紹介されている<sup>2)</sup>。

戦後になると、昭和32年刊『続片聾記 下』(c)で『稿本福井市史』の典拠となった部分が翻刻され<sup>3)</sup>、同52年には類似資料の「諸師範家先祖由緒人名書」の翻刻を含む『福井藩史事典』(d)が刊行された<sup>4)</sup>。

さらに平成に入ると、元年(1989)刊『藩史大事典 第3巻』(e)が流派と起源、師範家をまとめた一覧表「藩の武術」を掲載し<sup>5)</sup>、同8年刊『福井県史 通史編4』(f)も『続片聾記』を典拠に各流派の師役を簡略に列挙<sup>6)</sup>、同20年刊『福井市史 通史編2』(g)は「越藩諸師家由緒記」(A0143-02035)を典拠に「表93 寛政5年(1793)福井藩の武芸師家」を掲載する<sup>7)</sup>など、同藩の武術の流派と師役の名が広く紹介されるに至った。

ところが、これらの文献はそれぞれに類似する資料を典拠にしているにもかかわらず、11の流派について、例えば鎗術の「本間流(神道流)」(b,c,e)と「神道流」(a,d,f,g)、剣術の「新陰流」(b,c,d,g)と「新影流」(a,e,f)、炮術の「極寄流」(a,b,c,d,e,f)と「極気流」(g)、馬術の「神当流陰渡辺流」(a,b,c,d)と「神当流」(e,f,g)のように表記の揺れが見られる<sup>8)</sup>。このなかには、実際に複数の表記が併用されていた例もあるが、明らかな誤記も含まれるようである。

また、各文献で扱われた流派数にも違いが見られ、鎗術は4流5家(b,d)と4流4家(a,e,f,g)、柔術が2流2家(a,b,c,d,e,g)と1流1家(f)、炮術に至っては4流5家(d)と4流4家(a,c)、3流3家(b,e,g)、2流2家(f)の4通りの扱いとなっている。

### (2) 寛政4年の師役

ここからは(a)～(g)の文献が依拠した寛政期(1789～1801)の資料の検討を通じて、嘉永2年(1849)時点の武術師役を確定する作業を行う。

まず、諸書が典拠とした『続片聾記』(c)は、当該部分の奥書に「右書ハ寛政七乙卯年冬十二月七日、飯嶋芳長与記有之」と見え、元は寛政7年(1795)に飯嶋氏が記したものという。

また、松平文庫にはこれに類似する内容の資料として、前掲「越藩諸師家由緒記」のほか「諸師家由緒書」(A0143-02036)、「師家由緒録」(A0143-02037)、「越藩師家由緒記」(A0143-02038)の計4点があり、越前史料(国文学研究資料館蔵)にも謄写本「越藩師家由緒録」(X0145-01120)が含まれている。この5点は収載する師役の順序、用字に細かな異同はあるものの、ほぼ同じ内容の写本とみてよい。前掲(a)で参照された「藩へ提出の流儀伝来由緒書」もこれに類し、また(c)が拠った飯嶋書も同系統からの写本と思われる。

これらの由緒記・由緒録は、書写奥書から寛政4年11月4日の幕命を受け、諸師役が藩に提出した由緒を集成したものであることが読みとれる<sup>9)</sup>。師役は36家あり（弓術7、馬術11、鎗術5、剣術3、居合2、柔術2、炮術4、兵学2の順に収載）、それぞれの由緒には「十二月」あるいは「子十二月」の日付があることから、同年12月に提出されたものと判断できる。この時の幕命は「家譜百二十一」（越葵文庫〈福井市立郷土歴史博物館保管〉A0150-01129）11月の部分に次のように引用されている。

一、同月<sup>日不詳</sup>武術御尋之儀ニ付、大目付桑原伊予守殿々左之通御書付被相渡之

別紙ニ申達候趣、足輕備打等之類者、何方ニ而も致調練候事ニ候得共、此度書出之儀者代々格別相伝世話致候類之儀ニ而、譬ハ犬追物、又者騎射、或者船方調練、水馬、備打火業杯之類ニ候、其外乗初之式等之類迄も、他方ニ無之、前々伝来候類之儀ニ而候事別紙

諸家ニ而前々々相伝教習致し来候<sup>(武脱カ)</sup>武術備等、其次第書出様ニ寄々可被達候、并面々家中之内、武芸格別拔群成者等、是亦書出候様可被達候

すなわち、各藩で以前から相伝教習されている武術について、武芸格別拔群の者を報告するよう命じた内容である。寛政4年は松平定信による寛政改革の時期にあたり、幕府は改革に着手した天明7年（1787）時点で「大名・旗本・御家人がともに質素儉約に努め、武技に専心すべき」ことを奨励し、同年中には幕臣のなかで「文学ならびに軍学、天文学、諸武芸の師匠の姓名、流派名、年齢、居所」を報告させるなど、文武の奨励を積極的に進めていた。寛政4年の達書もこの文武奨励策を受けて出されたもので、今度は諸藩にまで調査・報告の範囲を広げるものであった<sup>10)</sup>。

翌寛政5年11月26日、福井藩から幕府への報告が行われ、現在は申上する程の「武芸格別拔群成者」はいないが、「古来々代々師範流儀致相統候者之内、先祖共流儀ニ取格別規模有之家柄之者」として、「宝蔵院流十文字鎗術 中村市右衛門勝行」、「五ノ坪流鎗術 慶増安大夫初繩」、「柔気流術 市橋右衛門定美」の3人分の由緒が列挙された（「家譜 百二十二」A0150-01130）。この時の報告とは別に36家分の由緒集成が幕府に報告されたか否かを確認することはできないが、この幕命があったおかげで寛政4年末時点の流派名と師役名、由緒などを明らかにすることができるのである<sup>11)</sup>。

### （3）嘉永2年の師役

その後、嘉永2年（1849）までの57年間で師役を免ぜられた家はなかったが、新たに筒井と西尾の2家が炮術師役に任じられていた。前掲36家とは異なり、この2家には師役としての由緒資料が確認できないことから、以下に判明する限りで経緯を概観しておく。

まず、筒井の就任時期は不明であるが、『越前松平家家譜 慶永』<sup>12)</sup>（以下『慶永家譜』と略す）天保14年（1843）7月29日条には「於御本丸、津田伝七指南之面々、筒井十大夫同道之面々、鉄砲御覧有之」と見え、この頃までには筒井が炮術の技芸を藩主の上覧に入れるほどの立場にあったことがうかがえる。また、嘉永2年8月に筒井十太夫が屋敷替を命じられた際の『福井藩士履歴』<sup>13)</sup>（以下『藩士履歴』と略す）の記事には「但、鉄砲場出来候地面江替被下候御内評也」とあり、この頃から屋敷地内に稽古のための鉄砲場を備えるようになっていた。

一方の西尾は、嘉永2年段階で源太左衛門が自由齋流津田源之丞家の「古老」（後述）であり、そ

の子十之丞も同流派の免状を受けている。しかし、2人はその2年前の弘化4年（1847）、藩命を受けて幕臣で高島流炮術師範の下曾根金三郎信敦に入門していた。

公、兼而西洋炮術の皇国に勝れたる事を聞召せし故、かゝる御時節と申、旁当勤番御奉行役西尾源太左衛門并召連れし倅十之丞<sup>後、</sup><sub>十左衛門</sub>其他十余人、於旗下西洋炮術高島流師範下曾根金三郎殿へ入門、炮術及銃陣調練法伝習を被命たり。源太左衛門父子ハ曾て自由斎流炮術の印可を極めたる<sup>(ママ)</sup>拔郡の上手なりけれハ、下曾ね氏も殊ニ感賞にて、不閲数月て高島流皆伝あり。<sup>(ママ)</sup>（中略）此後、西尾父子於御国師範ニ被命、執心之者へハ伝習候様被仰付、追々入門の者も出来し（以下略）

これは『奉答紀事』<sup>14)</sup> 弘化4年の記事であるが、『続片聾記 中』<sup>15)</sup> 同年5月の部分には次のように記されている。

同十七日、江戸表ニ而西洋流炮術師下曾根金三郎殿へ弟子入被仰付候面々、西尾源太左衛門、村田竜之進、筒井十大夫、青木吉蔵右衛門、柴田忠蔵、十九日、数賀山彦右衛門弟子入被仰付  
注目すべきは西尾だけでなく、筒井の名も見えることで、2人はともに高島流炮術に入門していた。上述のとおり、筒井はこの時点ですでに他流の師役に任じられていた可能性が高いが、西尾は同年中に高島流の印可を受け、帰国後に同流師役に任じられたと『奉答紀事』嘉永元年の次の記事は伝えている。

当年ハ専ら海岸防禦の御備あるへきの御心算にて、夫々御評議有之、又、西洋炮術為御端立、西尾源太左衛門師範并稽古所御渡等之義被仰出（以下略）

こうして嘉永2年時点での武術師役は、鎗術5、兵学2、居合2、剣術3、柔術2、弓術7、炮術6、馬術11の計38家であったことが確定できる。表1には各師役の流派名、姓名、家格・身分、給禄、師役就任時期を示した。このうち流派名については、比較的誤記の少ない「諸師家由緒書」に記載される名称をそのまま採録したが、推測によったものは〔 〕で示している。このうち弓術の「印西派射術」と「日置伝来吉田派弓術」は同じ流派を指すと思われたが、統合せず転記するにとどめた。また、家格・身分は『福井市史 通史編2』の「表18 嘉永5年（1852）福井藩家臣団の構成」に依拠し、給禄と就任時期は『藩士履歴』、諱は「姓名録」（A0143-02010～02019）によって補った。

なお、翌嘉永3年には居合田宮流師役の鰐淵が長剣術の師役を兼ね<sup>16)</sup>、同年末には炮術師役6人が新たに制定された御家流炮術の師役を兼ねることになる（西尾の「高嶋流之儀ハ其儘ニ被立置」とされた<sup>17)</sup>）。

その後、廃藩までの師役の動向を『藩士履歴』および「越前世譜 茂昭様御代」（A0143-01973～01992）によってたどっておく。

まず、弓術であるが、嘉永5～安政元年（1852～54）にかけて下士の組之者（足軽）のうち全ての弓組が順次鉄炮組へと改められたため、藩内では弓術が徐々に衰微して各流派が立ち行かなくなっていく。元治元年（1864）には師役一統が自ら師役御免を願い出ており、それが翌慶応元年（1865）閏5月晦日に認められた。藩主の「御師範家」である飯嶋家を除く6家に対して「弓師役御免」が言い渡されたのである（飯嶋は次の当主の家督時、慶応3年12月22日に弓術師役御免）。

次に炮術については、慶応3年10月21日に「御趣意ニ付炮術師役之面々御免被成、新ニ西尾十左衛門儀炮術奉行被仰付」として、6人の師役が免ぜられ、西洋炮術を主導してきた西尾だけが改めて炮

表1 嘉永2年(1849)の福井藩の武術師役

	流派名	姓名	資格・身分		給禄	就任時期	印
鎗術	宝蔵院流十文字鎌	中村政右衛門尚武	中士	番士(大番)	100石	天保14.7.25	中
	無辺流鎗術	村田新八秀勝	中士	番士(大番)	100石	天保8.7.25	村
	五坪流鎗術	山田弥三右衛門縄友	中士	番士(大番)	18石5人	文政4.9.16	山
	本間流	荒川喜代太 一	下士	一統目見(徒)	15石3人	天保14.1.25	荒
	五坪流鎗術	慶増安太夫 一	下士	与力(笹治大学)	23石5人	不明	慶
兵学	義経流軍伝	井原源兵衛頼賛	中士	役番外	150石	文化6.2.18	井
	武田流兵学	明石甚左衛門豊弘	中士	番士(書院番)	100石	文政13.11.25	明
居合	竹内流	高島甚五左衛門信尹	中士	番士(書院番)	100石	文政9.5.3	高
	田宮流居合	鰐淵三郎兵衛幸貞	中士	役番外	150石	文化8.9.25	鰐
剣術	新陰流兵法	出淵伝之丞盛親	中士	番士(大番)	150石	天保9.3.5	出
	新影松田方幕屋流	横山十郎兵衛時庸	中士	番士(留守番)	25石5人	文政2.2.20	横
	富田流剣術	坂上彦八郎時敏	中士	番士(大番)	25石5人	天保7.3.5	坂
柔術	柔气流	市橋万右衛門定省	中士	番士(書院番)	100石	天保6.11.29	市
	拍子流居合柔	久野猪兵衛昌近	中士	番士(大番)	20石3人	天保10.9.29	久
弓術	[日置伝来吉田派弓術]	飯嶋三五左衛門由要	中士	番士(大番)	100石	天保10.1.29	飯
	[印西派射術]	坂田助右衛門政棟	中士	番士(留守番)	25石5人	文化12.2.11	サ
	印西派射術	吉田茂左衛門貞成	中士	役番外	130石	文政9.4.5	吉
	[日置伝来吉田派弓術]	伊藤助十郎長邦	中士	番士(大番)	100石	文政12.11.16	伊
	日置伝来吉田派弓術	落合丈右衛門由成	中士	番士(留守番)	100石	文政7.9.25	落
	竹林流	荻野助太郎正修	中士	番士(大番)	100石	天保14.11.4	荻
	道雪流	岡田長兵衛 一	下士	与力(有賀内記)	100石	不明	岡
炮術	長谷川流	長谷川八十郎勝昭	中士	番士(大番)	130石	天保9.3.5	長
	自由斎流	津田源之丞時中	中士	番士(大番)	150石	文政12.12.11	津
	極寄流	宇都宮五郎助綱孝	中士	番士(大番)	100石	天保9.12.5	宇
	自由斎流	津田伝七則徴	中士	新番	15石3人	不明	ツ
	(不明)	筒井十太夫光政	中士	番士(大番)	100石	不明	筒
	高島流	西尾源太左衛門教寛	中士	役番外	250石	嘉永1.-	西
馬術	八条流馬術	柄田与次内直重	中士	番士(大番)	100石	不明	-
	大坪流	国分次郎太夫忠治	中士	番士(書院番)	100石	文化13.10.20	-
	大坪流	関平太夫英宣	中士	番士(大番)	100石	文政3.9.16	-
	大坪流	国沢助左衛門苗久	中士	番士(大番)	100石	不明	-
	大坪流馬術	町田左衛馬利成	中士	番士(大番)	100石	天保5.2.29	-
	大坪流	伊藤利藤太正澄	中士	番士(大番)	17人	文化10.8.29	-
	大坪流馬術	松本小平太福茂	中士	番士(大番)	18石3人	不明	-
	[神当流陰渡辺流馬術]	山田藤内幸年	中士	番士(大番)	100石	天保10.6.25	-
	神当流陰渡辺流馬術	勝村三太左衛門利貞	中士	番士(大番)	25石5人	文政3.11.5	-
	神当流陰渡辺流馬術	安西梅干之助為如	中士	番士(大番)	20石4人	弘化5.3.16	-
	神当流陰渡辺流馬術	長谷川熊三郎一貞	中士	番士(大番)	20石4人	天保13.11.16	-

\* 給禄の表記、100石は知行100石、18石5人は切米18石5人扶持、17人は17人扶持を意味する

術奉行に任じられている。

また、明治2年(1869)になると1月29日に御馬方が「家業御廃止」、2月20日には鎗術師役、11月28日には居合・剣術・柔術・兵学に関しても「流義之師役」や「流儀之兵学世話之儀」が免ぜられることとなった。

## 2. 「御家中武術免状受取候面々取調書」

ここからは「取調書」の成立経緯と記載事項に検討を加え、藩士の免状取得状況を一覧表にする作業を行う。

### (1) 成立経緯

「取調書」は「文武」と書かれた袋入り資料約30点のうちの1つである<sup>18)</sup>。縦7.1×横18.8cmの小型の横帳で全30丁。表紙には題名「御家中武術免状受候面々取調書」のほか、朱で「辰二十」、墨で「文武」の書き入れがある(図版1)。奥書に「嘉永二酉年調(中略)土屋貴純」とあることより、嘉永2年(1849)、目付の役にあった土屋十郎右衛門貴純が、藩内の武術免状取得者を調査した結果であることが判明する。

その経緯は『奉答紀事』嘉永2年3月の記事に「御発駕前になり、文武勧誘取調之儀本多四郎右衛門へ被命、御目付ニ而浅井八百里へ文事、土屋十郎右衛門へ武事掛りを被仰付たり」と見えることで説明できる。すなわち家老の本多を通じて、目付の浅井が「文事之儀者厚相心得取調候様」、同役の土屋が「武事之儀者厚相心得取調候様」との主命を受け、それぞれに取調を行ったことになる(下命の日付は『藩士履歴』より3月18日)。

藩主慶永自身、天保10年(1839)の鎗術(中村)を皮切りに、翌11年に剣術(出淵)と兵学(井原)、同13年に柔術(市橋)、同14年に居合(高島)と弓術(飯嶋)、弘化3年(1846)に炮術(長谷川)に入門しており、いずれも数年のうちに免状や目録を取得していた(『慶永家譜』・『奉答紀事』)。また、初入国した天保14年からは「御家中武芸御覧」を開始し、御座所御稽古所に召し寄せるだけでなく「諸流稽古所御立寄」も行った。これは「御覧ニ難罷出次男・弟或ハ御目見已下の者共の武芸も御覧にて、士気御奨励可被遊との思召」であったという(『奉答紀事』)。

嘉永2年3月8日には、藩士の手本となるべき高知席の面々に対して、武術稽古は「別日内稽古」だけでなく「常稽古日」に厚く修行すべきことを命じ、同月23日には御用人に対して「壮年之者厚修行可致、役儀相勤候面々も余力を考、無油断心掛可申候」と「文武之儀一統心懸之儀」の貫徹を申し渡していた(『慶永家譜』)。

慶永による文武振興策は、海岸線を脅かす異国船渡来と無関係ではなく、海岸防禦を視野に入れた士気振興とも関連するものであった。「取調書」はこうした経緯を背景に作成されたものだったのである。

### (2) 「取調書」の記載事項

「取調書」の記載事項は凡例部分と免状取得状況を示す本文とに大別される。本文にあたる藩士姓名と師役一字印が列挙された部分は稿末に別表として掲載するため、ここでは凡例と項目名、奥書部分のみを翻刻しておく。

#### 一、一字印ヲ以何方之免状与申覚

(27人分の師役の姓名と一字印 表1・図版2)

御馬方弟子之分ハ総而馬印与認置候事

早引之為ニイロハ分ニ仕置候事

(古老与唱候面々ハ、前印ノ側ニ朱点ヲ加候ハ古老与唱候分ニ御座候事

新番格已上与申内、御鷹方・御料理方・御馬医等之面々、免状受不申人ハ相除候事

定府同断

▲名ノ下ニ此印、文政十三寅十月十七日御手元ノ御下緒一掛ツ、被下置候印

## ●此印、文学出精ニ付孝経被下候印

## 一、新番格以上ニ而武術免状以上之手数有無覚

(第1グループ997人分〈新番格以上〉の姓名と一字印 **別表 No.1～997・図版3**)

(第2グループ12人分〈師役〉の姓名と一字印 **別表 No.998～1009**)

(第3グループ45人分〈与力〉の姓名と一字印 **別表 No.1010～1054**)

是ヨリ以下免状受候者斗姓名書之候事

(第4グループ4人分〈御徒目付〉の姓名と一字印 **別表 No.1055～1058**)

(第5グループ15人分〈御徒〉の姓名と一字印 **別表 No.1059～1073**)

(第6グループ29人分〈陪臣〉の姓名と一字印 **別表 No.1074～1102**)

嘉永二酉年調

右数多之内万一相違モ御座可有哉、御免奉希候

土屋貴純

## (2 a) 採録対象

まず、本資料の採録対象を6つのグループに分けて概観する。ここでも上士・中士・下士の区分は『福井市史 通史編2』の「表18 嘉永5年(1852) 福井藩家臣団の構成」に依拠する。

まず、第1グループは「新番格以上」すなわち士分(上士と中士)および卒(下士)の最上席に位置する新番格を含む997人である。苗字のイロハ順に分けられ、さらにその中は受けた免状の多い順に配列されている。免状を1つも取得していない者でも上士・中士は基本的に全員採録対象となっているが、御鷹方・御料理方・御馬医や江戸定府の者は採録の対象外である。また、当主だけでなく「同 小三郎」(青山弥五右衛門惣領)や「弟 鉄吉」(厚治丈助弟)、「同 辰五郎」(宇都宮長十郎伯父)、「同 城太郎」(秋田三五左衛門孫)のような当主の子弟や伯父、孫は採録対象に含まれる。かれらは藩の軍簿である「軍帳」に採録された者とみられ、軍事動員の際の対象者と言い換えることができるだろう。

第2グループは、他の種目や自身の流派以外から免状を受けた師役とその子弟あわせて12人で、やはり免状の多い順に配列されている。このうちには御馬方(馬術師役)が1人含まれる一方、下士(徒・与力)に属する師役はここには採録されていない。

第3グループは、下士に位置づけられる与力45人である。貞享3年(1686)の半知以降、福井藩では与力は家老と城代等に付けられ、幕末には家老3人に各10人、城代に9人の計39人の与力が付けられた。本資料には3人の家老、狛木工に付けられた11人(うち子弟1人)・狛帯刀の13人(うち子弟3人)・笹治大学の10人、また城代有賀内記の11人(うち子弟2人)が載る。

以上3グループは、免状のない者でも特定の役を除く全員の名が記載されるが、以下に示す新番格を除く下士や陪臣については、「免状受候者斗」すなわち免状取得者だけの姓名が記されている。

第4グループは「御徒目付」4人、第5グループは「御徒」15人である。徒目付は徒の中から選ばれた者で、嘉永5年の慶永代の「給帳」<sup>19)</sup>では14人の名前が確認される。一方、徒には定員がなかったとされるが(『福井藩士事典』)、上記「給帳」では徒組頭3人と徒組62人の名が載り、中士や下士の子弟が家督までの期間に徒として召し出される例もあったようである。

最後の第6グループは、士分でも卒でもない、上士の家来すなわち陪臣29人である。本多内蔵助家来7人をはじめ狛木工2人・狛帯刀1人・笹治大学1人・本多肇2人・松平庄兵衛1人・本多四郎右衛門2人・酒井波門2人・有賀内記4人・酒井外記2人・芦田内匠1人・萩野小四郎2人・明石健吉1人・笹治権右衛門1人となっている。陪臣は藩からみれば又者であるため、全ての人数が藩に把握されていたわけではないが、府中2万石を領する本多内蔵助については明治初年「給禄高控」<sup>20)</sup>に204人、

知行4025石の酒井温（外記の養子）には明治2年（1869）時点で28人<sup>21)</sup>、また知行1000石の菅沼与市郎（市左衛門物領）には同年時点で4人の譜代の家来がいた<sup>22)</sup>。ここではこれら陪臣のうち免状取得者のみが採録されている。

「取調書」の記載内容から、その人物がどの流派の免状を取得したか、あるいはどの流派の古老であるかを知ることができるが、それ以上の詳細な分析を行うには情報が少なすぎる。そこで「取調書」記載の姓名を『藩士履歴』や「士族略履歴 壺～拾参（六欠）」（A0143-00471～00482）、「姓名録」、「諸役人并町在御扶持人姓名（五）御徒目付御徒組頭」（A0143-01001）、「古御軍帳」（A0143-20981）などと照合し、当該人物の家格・身分、さらには子弟である場合どの当主の子弟であるかを特定する作業を行った（別表）。

採録対象について、嘉永5年「給帳」と嘉永2年「取調書」を比較したものが表2である。「給帳」は給禄を受ける者すなわち当主のみが記されるのに対し、「取調書」は「軍帳」掲載の子弟まで載せる点に違いがある。この表からは、「取調書」は上士については府中本多家を除いて漏れなく採録しているが、中士は番士クラスで御鷹方・御料理方・御馬医や江戸定府の者が除外され、また医師その他も採録していないことがわかる。また下士は、与力のみ全員採録対象となっているが、小役人・小役人格では徒目付4人、一統目見席では徒15人が採録されるだけである。したがって下士の大半を占める目見以下約1,700人のうちには、免状を受けた者がいなかったこともわかる。

表2 家格・身分ごとの採録対象人数

嘉永5年「給帳」			嘉永2年「取調書」				
家格・身分			当主	子弟	計	グループ	
士分	上士	本多家	1	-	-	-	G1
		高知席	16	16	8	24	
		高家	2	2	1	3	
		寄合席	38	38	36	74	
		定座番外席	14	15	7	22	
	計		71	71	52	123	-
	中士	役番外	106	97	87	184	G1・2
		書院番・小姓・大番・留守番	495	437	184	621	
		新番	68	51	18	69	
		医師その他	49	0	0	0	
計		718	585	289	874	-	
士分計		789	656	341	997	-	
卒	下士	新番格	13	7	5	12	G1
		与力	39	39	6	45	G3
		小役人・小役人格	84	4	0	4	G4
		一統目見席	87	11	4	15	G5
		目見以上					
	目見以下	小算・中判・小寄合・坊主・下代	347	0	0	0	-
	組之者	1341	0	0	0	-	
卒計		1911	61	15	76	-	
合計		2700	717	356	1073	-	
陪臣			-	29	0	29	G6

\* 嘉永5年「給帳」の数は『福井市史 通史編2』の表18に依拠



## (2 b) 免状の受取状況の表示

「取調書」では藩士がどの流派の武術免状を受けたかを、師役の苗字「一字印」を付すことで示している。ただし、馬術だけは流派の別にかかわらず「馬」の1字とし、津田家は炮術に2家あるため、津田源之丞を「津」印、津田伝七を「ツ」印、また弓術に坂田家と剣術に坂上家があるため前者を「磔」印（本稿では便宜的に「サ」と表記）、後者を「坂」印としている（表1参照）。例えば、「馬津坂荒 中根鞆負」との表記がある場合、これは中根が馬術師役、炮術師役津田源之丞、剣術師役坂上彦八郎、鎗術師役荒川喜代太の4人から武術免状を受けたことを意味する。

また、師役一字印の脇に朱点が付されるものは、その人物が単に免状を受けただけでなく、その流派における「古老」であることを意味する（別表では一字印+「2」で表記）。この件に関連して、『由利公正伝』に載る以下の逸話が注目される。

由利公正（1829～1909）がまだ三岡石五郎と称していた弘化4年（1847）のこと。無辺流鎗術師役である村田の道場には「古老」の嶋津波静（右太夫弘信。1760～？）が来ていて、師役の新八（秀勝）からも一目置かれる存在だった。波静は若い頃、石五郎の曾祖父・次郎左衛門（武樹。1726～1774）から鎗術の教えを受けていたが、その次郎左衛門は村田新八の曾祖父にあたる安右衛門（英至）の後見を務めた人物だったという<sup>23)</sup>。

『藩士履歴』の村田安右衛門の項には「明和七寅七月廿五日養父市郎左衛門跡目無相違、大番入、家芸可致出精旨、後見河村五左衛門・三岡次郎左衛門被仰付」、続けて「安永六酉七月廿九日指南」とあることより、明和7年（1770）の家督相続後、安永6年（1777）に師役に任じられるまでの7年間、河村五左衛門（氏意）と三岡次郎左衛門（武樹）の2人の「後見」を得て鎗術の技芸を磨いていたことがわかる。嶋津波静もまた天明元年（1781）に安右衛門の家督を相続した村田新之丞（秀彪）の後見を津田大吉（成庸）とともに務めており、寛政元年（1789）に新之丞が「流儀之鑑指南」を命じられると、2人は後見を免じられている。

また「取調書」と同じ袋に入った「辰十五（文武ノ書付）」（A0143-02479-006）には「嘉永二年己酉七月十日」の日付とともに師役の面々の名刺が載るが、「江戸詰 長谷川八十郎」に対し「名代 小栗治右衛門」、同じく「江戸詰 伊藤助十郎」に対し「名代 平田幾郎右衛門」、「忌中 坂田助右衛門」に対し「名代 野治小兵衛」の名前が見える。この「名代」として記された3人は、いずれも「取調書」では朱点を付された古老として記録される人物である。

このほか『奉答紀事』には、嘉永2～3年（1849～50）に出府中の慶永の文武稽古の相手として、高野半右衛門（儒者）、長谷川八十郎（炮術師役）のほか、文武御相手近習席の松波甚左衛門（鎗術・居合）、近習番の坂井又八郎（剣術）、使番供頭兼帯の川瀬次郎右衛門（柔術）、小姓の岡部半兵衛（弓術）の名が挙げられる。「何れも流義印可之者にて御師範代ニ被仰付」とあるように、「取調書」では松波は鎗術（中村）と兵学（明石）・居合（高島）、坂井は剣術（出淵）と炮術（宇都宮）、川瀬は柔術（市橋）、岡田は弓術（飯嶋）の古老印が打たれた人物であった。

炮術師役になって時間の浅い筒井と西尾に古老は存在しないが、少ない流派でも3人（居合鰐淵・弓術坂田）、多いところでは15人（鎗術村田・同荒川）の古老がいた。かれらは師役の後見や名代、師範代を務められる経験と技芸を備えていたのである。なお、安政4年（1857）9月11日には古老を

「世話役」とよび、師役とも相談のうえ流儀を盛んにすべきことが藩から命じられている（『慶永家譜』）。

この古老印とは別に、姓名の下に▲印が付された人物が8人いる（雪吹牛兵衛・本多五郎右衛門・大谷半平・大橋金兵衛・土屋十郎右衛門・上坂五右衛門・松波甚左衛門・坂井又三郎）。この点に関して、『続片響記 上』文政13年（1830）10月17日条には「師役之面々并弟子へ御下緒被下」として次のように載り、下緒を下賜された者として上記8人を含む13人の名が記されている<sup>24)</sup>。

各弟子中格別武芸御覧被遊、御満悦被思召、一統御褒詞被成下度候得共、大勢之事故不被任思召候二付、御目見ニ留り候者へ御手先御下緒一掛ツ、被下置候、此余相洩候面々追而御褒美可被遊候、尚以出精いたし候様可被引立候、右之通御中老天方孫八ニ而渡候（以下13人の人名略）

嘉永2年「取調書」時点では8人全員がそれぞれ2～5の流派で免状を取得しており、なおかつ2～3の流派で古老となった人物であったため、印を打って特記されたものと思われる。

また、これとは別に●印が付された13人は、『続片響記 上』文政13年11月5日条に「読書心掛之面々江、孝経一冊・筆一对・墨一延被下置候」の対象となった者たちである。このうち田川清助・高野半右衛門・荒川小三郎の3人は、嘉永2年3月21日の文事取調の成果である「覚（学塾覚）」（A0143-02479-033）において「二十人斗 高野半右衛門」「四十人斗 荒川小三郎」「三十四五人 田川清介」<sup>25)</sup>と記されており、私塾で数十人の門弟に学問を教える立場であったことがわかる。

### 3. 分析と考察

ここからは別表を組み替えながら、統計的な分析を行う。これによって、「はじめに」で掲げたいくつかの疑問に対する回答が得られるはずである。

#### （1）家格・身分および種目ごとの免状受取者総数

家格・身分を上士・中士・下士・陪臣の4つに区分し、師役・流派の別を無視して8つの種目ごとの免状取得者数を示したのが表3である。

取得者数が最も多いのは鎗術（師役5人）で344人、次に弓術（師役7人）で339人、ついで剣術（師役3人）の227人と続く。柔術161人と

居合146人、兵学126人はそれぞれ師役が2人で、稽古所数が少ないことから取得者数も少ないように思われるが、11人の師役（御馬方）がいる馬術が最も少ない。

次に家格別の状況を概観する。上士での取得者数は多い順に1弓術、2鎗術・馬術、4兵学、5剣術、6居合、7炮術、8柔術であり、柔術が極端に少ないのが特徴的である。また中士では1鎗術、2弓術、3剣術、4柔術、5居合、6炮術、7兵学、8馬術の順となり、上士の順序とは入れ替わりが見られる点が注目される。鎗術と弓術の順位が高いのは上士と共通するが、上士では5位・7位・8位だった剣術・炮術・柔術が、中士ではそれぞれ3位・6位・4位と上昇している。下士と陪臣ではそもそも取得者数自体が少ないが、下士では1鎗術、2弓術、3炮術、4剣術、5柔術、6居合、7兵学の順で馬術の免状取得者はいない。陪臣では1弓術、2馬術、3鎗術、4剣術、5兵学・炮術、

表3 家格・身分および種目ごとの免状受取者総数

家格	種目ごとの免状取得者数							
	鎗	兵	居	剣	柔	弓	炮	馬
上士	39	35	25	28	6	50	17	39
中士	265	85	116	180	148	255	114	71
下士	35	3	4	15	5	24	16	0
陪臣	5	3	1	4	2	10	3	7
合計	344	126	146	227	161	339	150	117

7柔術、8居合の順序となり、馬術が上位に来る点に特徴がある。

なお、下士で注目される点は、戦時に長柄組・弓組・鉄炮組などとして鎗隊・弓隊・銃隊に編成される組之者（足軽）に免状取得者がいない点である。しかし、嘉永5年（1852）の「給帳」で1,341人を数える組之者が1人も武術師役のもとに入門しなかったわけではなかった。

天保14年（1843）11月21日、御座所に各稽古所の面々が呼び寄せられて寒稽古の上覧が行われた。『奉答紀事』によれば、そもそも慶永としては「夫々の稽古所へ可被為入思召」もあったが、「却而迷惑之情実」もあったため御座所の御稽古所に呼び出すことにしたとし、「稽古所同様出精之者ハ御目見不相叶者并足軽・陪臣迄も罷出たり」と見える。すなわち、普段のそれぞれの稽古所同様に、修行出精の者は御目見以下の者や「足軽・陪臣」までもが御座所に招かれたというのである。この記事から、足軽（組之者）も師役に入門して武術修行をしていたことが裏付けられる。

「称号の授与には、既定による金銭の納入をともない、この制度の背景には武術家の経済的利益が結びついていた」<sup>26)</sup>との指摘があるように、免状を取得するには師役に納めるそれなりの金銭が必要だったと推測される。下士層に取得者が少ないのは、それに耐えうるだけの収入を持たなかった点も一因となっていたのだろう。

### （2）1人あたりの免状数

つぎに藩士1人あたり、いくつの武術免状を取得していたかを確認する。取得した免状数の分布を当主と子弟に分けて示したのが表4である。

嘉永5年「給帳」に載る新番格以上と師役・与力の当主の総数は841人であるが、同2年の「取調書」では特定の役が除外されているので採録人数は当主が702人、子弟が352人となっている（第1～3グループ）。このうち1つでも免状を取得している当主は560人（約80%）、子弟では188人（約53%）である。また、複数の流派から免状を取得している当主は343人（約49%）、子弟は111人（約32%）で、当主では少なくとも半数が複数の稽古所に通い、武術修行をした経験を持つことがわかる。

なお、1つの種目で複数流派から免状を取得している人物が3人いる。兵学の義経流軍伝（井原）と武田流兵学（明石）の両方の免状を持つ芦田内匠（上士）は、鎗術（中村）・柔術（久野）・馬術の免状も併せ持ち、弓術（落合）と炮術（宇都宮）では古老である。また、杉浦幸右衛門（中士）は弓術（吉田）では古老、鎗術（荒川）と馬術に加えて炮術では自由齋流（津田源之丞）と高島流（西尾）の2流派で免状を取得する。さらに数賀山彦右衛門（中士）は、鎗術（慶増）と炮術の高島流（西尾）で免状、さらに炮術の自由齋流（津田伝七）では古老となっている。高島流は師役の西尾父子自身もそれぞれ自由齋流（津田源之丞）の古老と免状取得者であったことから、先に自由齋流を修行した者が、新しい西洋式の高島流を修行し直すという流れがあったのだろう。

### （3）当主と子弟の入門先

「取調書」では312人の当主に対し、その子弟と断定・推定できる者が356人採録されている。1人

表4 「新番格以上」1人あたりの免状数

免状数	当主数	子弟数	人数計
7	1	0	1
6	3	5	8
5	15	6	21
4	42	16	58
3	100	30	130
2	182	54	236
1	217	77	294
0	142	164	306
人数計	702	352	1054

\*免状数には古老の数も含む

の当主に対し複数の子弟が載る場合もあるため家数としては312となる。このうち同一種目内で同一師役から免状を受けた例が103家で確認された。例えば、味岡甚左衛門（中士）とその子弟3人は全員が共通して鎗術（中村）と弓術（坂田）で免状を取得し、上坂五右衛門（中士）と惣領五郎助は鎗術（中村）・剣術（横山）・弓術（坂田）・炮術（津田伝七）の4師役からともに免状を取得している。

その一方で当主と子弟が同一種目で別々の師役から免状を得た例が20家で見られた。例えば、有賀内記（上士）とその惣領此面は、ともに鎗術（荒川）・兵学（明石）で同一師役から免状を受けているが、弓術では内記が吉田、此面が坂田から異なる師役からの取得である。また、原平左衛門（中士）と惣領甚太郎は兵学（明石）・剣術（出淵）・炮術（津田源之丞）では共通するが、鎗術では村田と中村、弓術では飯嶋と荻野に分かれる。さらには五坪流鎗術師役・山田弥三右衛門（中士）の惣領安之丞が同じ流派とは言え、別の師役の慶増から免状を受けている点が注目される。『藩士履歴』によれば、安之丞は「実松村市兵衛弟」とあり、兄の市兵衛もまた慶増から免状を受けていた。つまり、松村家では兄弟揃って慶増のもとで修行を積んでいたところ、弟の五坪流の技術が見込まれて同じ流派師役の山田家に養子に入ったという例である。

総じて家族が同一の師役のもとで武術修行し、免状取得にまで至る例が一般的と言えそうだが、一部に例外もあったことになる。

（4）家格・身分ごとの師役別免状数

ここからは各種目につき、家格・身分ごとの師役別免状数を詳しく分析する（表5）。

表5 家格・身分ごとの師役別免状受取数

家格・身分	人数	鎗術					兵学		居合		剣術		柔術		弓術					炮術				馬術						
		中	村	山	荒	慶	井	明	高	鰐	出	横	坂	市	久	飯	サ	吉	伊	落	荻	岡	長		津	宇	ツ	筒	西	
府中本多家	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
高知席	24	5	0	0	2	0	4	12	7	0	4	3	0	1	1	0	1	2	0	3	4	4	0	0	2	0	0	1	15	
高家	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0		
寄合席	74	18	0	0	5	0	7	8	8	1	7	4	5	0	2	6	1	7	1	1	0	7	2	8	0	0	0	0	19	
定座番外	22	4	0	0	4	0	2	2	5	4	2	2	0	0	2	5	3	2	0	1	1	0	1	1	0	0	0	5		
計	123	27	1	0	11	0	13	22	20	5	13	10	5	1	5	11	6	11	1	5	5	11	5	9	2	0	0	1	39	
中士	役番外	184	21	19	0	18	1	8	22	21	16	17	24	5	12	8	11	21	10	4	12	6	2	8	15	3	4	0	28	
	書院番・小姓・大番・留守番	621	63	41	26	22	35	27	24	37	40	49	47	28	69	46	24	32	24	27	25	25	21	12	14	14	24	1	2	42
	新番	69	0	5	1	0	13	4	0	2	0	0	5	5	10	3	0	0	0	1	0	2	8	1	0	3	13	0	0	1
	医師その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	874	84	65	27	40	49	39	46	60	56	66	76	38	91	57	35	53	34	32	37	33	31	21	29	20	41	1	2	71
下士	新番格	12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
	与力	45	0	0	0	0	27	1	1	2	0	0	0	9	0	1	0	1	0	0	0	2	16	0	1	0	11	0	0	
	小役人・小役人格	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	
	一統目見席	15	0	0	1	0	5	1	0	1	1	0	0	5	2	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	
	小算・中判・小寄合・坊主・下代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	組之者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	76	0	0	1	0	34	2	1	3	1	0	1	14	2	3	0	1	0	0	0	3	20	0	1	0	15	0	0	0	
陪臣	29	0	3	1	0	1	3	0	1	0	0	2	2	0	2	0	0	3	0	3	1	3	0	2	1	0	0	0	7	
総計	1102	111	69	29	51	84	57	69	84	62	79	89	59	94	67	46	60	48	33	45	42	65	26	41	23	56	1	3	117	

#### (4 a) 鎗術

鎗術では家格・身分の違いによる顕著な傾向が認められる。上士123人中、39人の免状取得者の師役の内訳は、多い順に中村27人・荒川11人・村田1人で、山田と慶増は0人である。この傾向は中士最上席の役番外でも見られ、59人の内訳は中村21人・村田19人・荒川18人・慶増1人・山田0人である。したがって、上士に加え役中は上士待遇を受けた中士の役番外は、宝蔵院流十文字鎌（中村）と本間流（荒川）への入門に偏る傾向があり、その一方で五坪流（山田・慶増）での修行者はほとんどいないことになる。

中士の中核である番士（書院番・小姓・大番・留守番）の免状取得者187人で特徴的なのは、五坪流（山田）が藩全体で29人の取得者がいるうちの26人、同様に無辺流（村田）も全体で69人の取得者がいるうちの41人がこの家格に集中する点である。

なお、中士のうち下士から昇格した新番、それに下士と陪臣とでは、全体的に鎗術の免状取得者が少ない。これらの家格では宝蔵院流十文字鎌（中村）と本間流（荒川）の取得者は皆無であり、無辺流（村田）と五坪流（山田）も僅かである。その一方で下士の与力では、27人全員が五坪流（慶増）で、他流はいない。この点は、師役の慶増自身が嘉永5年に新番に取り立てられるまでは、家老の笹治大学方に付された与力であったこととの関連をうかがわせる。与力は城下北部の与力町に集住しており、慶増の稽古所が近所にあったことも集中の要因とみられる。

#### (4 b) 兵学

義経流軍伝（井原）と武田流兵学（明石）の両流儀で126人の免状受取者がいるうち、上士35人・中士85人に対し、下士と陪臣は各3人ずつしかいない。兵学は他の武術とは異なり、個の技を磨くものではなく、用兵や攻城の方法を学ぶことが目的である。そのため兵を率いる側ではなく、率いられる側の下士に兵学を学ぶ者は少なかったのではないだろうか。反対に上士では当主71人中22人と高い割合（約31%）で免状を受け取った者がいる点が注目される（別表）。

#### (4 c) 居合

竹内流（高島）・田宮流居合（鰐淵）の両流儀で146人いる免状受取者のうち、上士が25人、中士が116人に対し、下士と陪臣はあわせて5人しかいない点は兵学の傾向と類似する。また、家老や城代を出す門閥家最上席にあたる高知席、藩主の親類にあたる高家では、田宮流居合（鰐淵）の免状取得者は皆無で、上士では竹内流（高島）の方が好まれたと言える。

#### (4 d) 剣術

新陰流兵法（出淵）は中士の新番と下士・陪臣の取得者が皆無であるのに対し、富田流剣術（坂上）では取得者59人の内訳が上士5人、中士38人、下士と陪臣で16人となっており、特に与力にいる9人の取得者が際立つ。

同じ刀剣を用いる武術でも、剣術が抜きあって構えてからの剣技であるのに対し、居合は基本的に座位からの抜刀の技をいう。そのため異なる武術として兼修する者もあり、新陰流兵法（出淵）79人の免状取得者のうちの6人、新影松田方幕屋流（横山）89人中の14人、富田流剣術（坂上）59人では1人が居合の免状を受けている。ただし、居合の竹内流（高島）に18人の兼修がいるのに対し、田宮流居合（鰐淵）は4人しかおらず、稽古内容に起因する相性のようなものがあつたことも推測される。

#### (4 e) 柔術

一般的に、柔術は「幕末まで、剣術のような武士必修の表芸とはならず、むしろ貴人警護・凶賊逮捕などに必要な実技として、棒術などとともに下士卒によって修行されることが多かった」とされる<sup>27)</sup>。しかし、高知席の岡部造酒が柔気流（市橋）、同じく高知席の芦田内匠や寄合席の荒川十右衛門惣領の八十郎、寄合席仙石万右衛門惣領の藤之丞ら5人が拍子流居合柔（久野）の免状を取得しており、福井藩では大身の上士であっても柔術修行をする例が見られた。また、中士では柔術の免状取得者が148人あり、藩全体の取得者の9割以上がこの家格に集中する。その一方で下士は5人、陪臣は2人が免状を受けているだけで、特にこの家格・身分に多いという傾向はない。

#### (4 f) 弓術

師役が7家あるため免状取得者も分散されるが、日置伝来吉田派弓術（飯嶋）は中士の番士以上にしか免状取得者がいない。その一方で道雪流（岡田）65人の取得者のうち、中士の新番8人、下士の新番格1人、与力16人、徒1人に徒目付2人、陪臣3人と比較的家格・身分の低い層が多い。特に与力に取得者が多いのは、鎗術師役の慶増同様、岡田もまた城代の有賀内記に付けられた与力であったことと関連があるだろう。

#### (4 g) 炮術

炮術全体150人の免状取得者の家格・身分ごとの内訳は、上士17人、中士114人、下士16人、陪臣3人である。このうち自由斎流（津田伝七）の免状取得者56人に上士が皆無で、新番13人、与力11人が際立って多い点は、師役自身が天保12年に徒目付から新番に取り立てられたことと関連があるだろう。なお、師役に任じられた期間が短い筒井と西尾には嘉永2年時点での免状取得者は少ない。

#### (4 h) 馬術

「取調書」では11の御馬方（馬術師役）は流派や師役の別なく、全て「馬」の一字印で示されるため、細かな傾向はつかめない。馬術全体でみれば、上士では当主71人中29人が免状を取得していて高い割合を示しており（約41%）、高知席の当主16人に絞ると取得者は10人となりさらに割合は高まる（約63%）（別表）。その一方で「馬乗り勤なるによりて一騎或は二騎」と数えられた与力には免状取得者はおらず、下士全体でみても皆無であり、馬術の免状取得者が上士と中士だけに特化したものであったことがわかる。

#### (5) 御師範家の傾向

藩主慶永自身が入門した師役すなわち「御師範家」として、鎗術の宝蔵院流十文字鎌（中村）、兵学の義経流軍伝（井原）、居合の竹内流（高島）、剣術の新陰流兵法（出淵）、柔術の柔気流（市橋）、弓術の日置伝来吉田派（飯嶋）、炮術の長谷川流（長谷川）があった。上記で検討した傾向を踏まえると、これら7人の師役のうち兵学を除く6流派には、上士の免状取得者数が比較的多く、下士が少ない傾向が見られ、師役のうちでもある種の「格」の違いがあったことが推測できる。

#### (6) 家格・身分の壁

流派によっては、上士の高知席と下士の徒のどちらにも免状取得者がいる例が見られる。しかし、実際に最上位の家格の当主や子弟が、下士とともに修行の時間を共有したのかとの疑問が生じる。この点については『奉答紀事』天保14年11月16日条に注目したい。

於御稽古所、御城代・高知之面々へ御武術御稽古拝見被仰付、畢而銘々擣ひ方御所望有之、但是迄高知之面々門閥に誇り、武術ハ其師範を私宅へ招き、一月三四次修行致候事にて、形斗りにて実用の心懸薄く相成来候故、右等の弊風御改正の思召にて態と被為召、且爾後ハ諸流稽古所へ罷越候様御沙汰有之

すなわち、高知席の面々は自らの家格・身分の高さを誇って師役宅の稽古所へは赴かず、逆に自邸に師役を招いて月に3～4回ばかり修行をするという弊風がみられた。そのような形ばかりで実用の心がけの薄い武術稽古を改正せんがため、慶永は御座所の御稽古所へ高知の面々を呼び寄せて自身の稽古の様子を見せるとともに、かれら自身にも武術を演じさせたという。しかし、この弊風は簡単には改まらなかったとみえ、嘉永2年3月8日にも家老本多肇から高知席岡部造酒に、次のような慶永の意向が伝えられた（『慶永家譜』）。

高知之面々武術稽古之儀、別日内稽古等斗ニ而者果敢行致間敷哉ニ付、席柄之事二者候得共、以来者常稽古日ニも勝手次第罷越候而厚致修行候様思召候事

この「別日内稽古」とは、通常の稽古（常稽古）ではなく、別日に内々に行う稽古あるいは自邸に師役を招いての内々に稽古すること指すものと思われる。こうした内稽古だけでは修行の敢行ができないおそれもあるので、家格・身分の事情はあるだろうが、日常の稽古にも行って厚く修行すべきことが言い渡された。つまり、上士から下士までが入り交じって修行に勤しむ光景は、家格の壁によって容易には見られなかったのである。

## （7）門人数

「取調書」が藩内の「武術免状受候面々」の取調書である以上、当然のことながらこれまで示した統計上の数字も免状取得者の数であって、門人数とは一致しない点は注意が必要である。例えば、門人は多いが免状は容易に与えない師役もいれば、逆に門人は少ないがそのほとんどに免状を出す師役もいたかもしれないからである。

厳密な門人数を知ることのできる資料は、今のところ存在が確認できない。唯一、大坪流馬術の御馬方・伊藤家に伝来した「(門人名簿)(上～下)」(伊藤家文書〈福井県文書館蔵〉A0213-00006～00008)が、享保16～文久3年(1731～1863)の133年間の門人数を伝えてくれるだけである。これによれば、この期間中に伊藤に入門したのは341人で、新規の入門者数は年平均で256人となる。馬術は師役(御馬方)人数が11人と多い割に免状取得者が少ないため、各師役のもとにいた門人数の規模もあまり大きなものではなかったのかもしれない。

また、嘉永2年7月10日の「武芸師役手当方達」では、藩から各師役に対して手当として下賜される稽古道具の数が列挙されており、ここからも各師役のもとにいた門人数の規模が推測できる（『慶永家譜』）。

まず、兵学の井原[57]と明石[69]に対しては同数の筆・墨・硯が、居合の鱒淵[62]・高島[84]に対しても同数の<sup>しない</sup>撓竹500本・撓革5筋・手袋2指が下賜されている(師役名後ろの[ ]の数字は免状取得者数。以下同)。つまり、この2つの種目では各師役のもとにいた門人数の規模にはさほど大きな隔たりはなかったものと思われる。

その一方で下賜品の数に差異の見られる種目もある。弓術では師役7家に共通して的弓5張・芝弓

5張・的<sup>や</sup>矢<sup>の</sup>筈（射的用の矢柄）100本・絃<sup>つる</sup>鰐<sup>べに</sup>代銀（弓に張る弦と弓製作に必要な膠の代金）100匁がそれぞれ下賜されたが、角木<sup>つのき</sup>（巻藁用の羽根のない棒矢）は吉田 [48]・荻野 [42]・岡田 [65] の3家に各1,000本、落合 [45]・伊藤 [33]・飯嶋 [46]・坂田 [60] の4家には半分の各500本が下賜された。つまり3家には門人が多く、それに比較して4家の方は少なかったと判断できるのである。

同様に炮術師役についても、津田源之丞 [41]・長谷川 [26]・宇都宮 [23]・津田伝七 [56] に下賜された合薬（火薬）は各10斤であったのに対し、師役としての歴の浅い筒井 [1] に対しては5分の1の2斤しか下されていないことから、筒井のみ門人数の規模が小さかったことが推定できる。

さらに剣術では出淵 [79] と横山 [89] にはそれぞれ撓竹1,000本・撓革10筋・手袋2指に対し、坂上 [59] に対しては半数の撓竹500本・撓革5筋と手袋2指・木刀5本が下賜されており、ここでは免状取得者数と推定門人規模との間に相関関係が見られる。同様に柔術でも市橋 [94] へ撓竹300本・撓革5筋に対し、久野 [67] へは撓竹200本・撓革5筋に居合刀修復料銀25匁が下賜されていて相関の関係が確認される。

なお、鎗術に関しては、直鎗<sup>すぐやり</sup>（穂先の真っ直ぐな素鎗）の下賜数が中村 [111]・山田 [29]・荒川 [51] の3家には10筋、村田 [69]・慶増 [84] へは15筋と差異が見られるが、中村にはこれとは別に十文字鎗（穂が十字の形をした十文字鎌）15筋、慶増へは竹鎗5筋、荒川へは長刀3振も併せて下賜されている。流派による稽古内容の差異も考慮すると、鎗術に関しては単純な比較は避けねばならないのかもしれない。

#### （8）高知席家中における師役

「取調帳」には陪臣の免状取得者29人の名が採録されているが、このうち本多内蔵助家来の成田逸平は自由齋流（津田源之丞）の古老であり、その子弟と思しき成田半五郎も同流から免状を受け取っている。逸平の名は「越府中給帳 安永四年より弘化三年」に「十人扶持 御目付鉄師 成田逸平」と載り、また「越府給帳（安政三年より文久三年まで）」には「五十石 自由齋流鉄師西ノ坊流 成田半之助」が載っている（半五郎から改名カ）<sup>28)</sup>。「鉄師」とは「鉄炮師役」を指すものであり、知行2万石の府中本多家家中では、本藩で修行した人物を師役に任命していたことになる。

「越府給帳」にはこのほかにも「師範家」として、林崎流居合師・大貫伝太郎、印西流弓師・滝多忠、新当流鎗師・若代勝之助、拍子流居合師・若林五大夫、武田流御家流兵学・都築半十郎、荻野流御家流鉄出藍流赤星山流箭師・松本童照、大坪流馬師・三上九左衛門、直心影流兵法師・増田為之介らの名前が載り（儒学教授と幼儀師は除く）、福井藩とは異なる流派も採用されていることがわかって興味深い。

また、明治時代に国内外で活躍した奇術師・松旭齋天一（1853～1912）の父親・牧野海平は、狛家（南狛家）の家来であったことが明らかにされているが<sup>29)</sup>、天一は聞き語りで「父は親<sup>（春嶽カ）</sup>覚公の御師範役を勤めて居りました真影流<sup>（ママ）</sup>の剣客で御座いまして」と語っていた<sup>30)</sup>。「牧野家過去帳」には「牧野家ハ元加賀藩士ニシテ剣道指南ナリシ由ナルモ人傷セシ為、福井ニ逃走シ来リ、市内米町（本町ノ北裏通新町名佐久良町）ニ道場ヲ開設、町家ノ子弟ニ教授（柳生神影流<sup>（ママ）</sup>）中、福井藩上席家老狛家ニ見出サレ、同家ノ師範役トナリ」との記載もあるという<sup>31)</sup>。知行4500石の狛家にも多くの家来がいて、明治2年（1869）に福井藩の士分に編入された者だけでも34人を数えることから、同家でも府中本多



家同様に剣術師役を置いていた可能性が指摘できる。

### おわりに

本稿では「御家中武術免状受取候面々取調書」の分析を通じて、幕末における福井藩士の武芸稽古について考察してきたが、未解明の部分はまだまだ多い。

各師役の稽古所について、『藩士履歴』等のなかで「手狭」を理由に隣接地からの「拝借」や「下置」などの記事が散見されるが、本稿では取り上げることができなかった。資料から坪数が判明する惣武芸所の稽古場との比較や、弓術師役の「稽古所射小屋」、炮術師役の「鉄砲場」などの検討により、師家道場の実態を捉える手がかりになるはずである。

また、藩公認の武芸とは別に「金剛角心流」という柔術の流派があり、徒の中山十兵衛（5人扶持）が嘉永5年（1852）11月16日に「出精相勤其上金剛角心流致世話候ニ付、勤向是迄之通ニ而御充行」として切米15石3人扶持を下し置かれていた（『藩士履歴』）。中山は「取調書」では兵学（井原）と柔術（市橋）の免状を受けた人物として載るが、その養父政右衛門が松岡町の町人に宛てた「金剛角心流柔術手数目録序」等も伝来している（吉野屋文書〈福井県文書館蔵〉B0030-01211）。陪臣が指南した流派も含め、表1で挙げた以外の流派の存在にも検討を加えるべきであろう。

武芸稽古は藩士の日常の一齣であり、本稿はその実態の一端を解明する基礎作業としての位置づけを持つと考えているが、ひとたびそれを「幕末期の武術修行」として捉えなおすとき、課題は途端に大きくなる。幕末福井藩の藩政改革を捉えるうえで、嘉永期から特に盛んになった文武振興策が、同時進行していた軍制改革とどうリンクしたかという視点が重要である。嘉永3年、福井藩に新たに導入された長剣術と御家流炮術は、いずれも武術の実戦化を進める動きを反映したものであり、安政4年（1857）に新設された惣武芸所でも長剣術と御家流炮術の稽古が行われていた。しかし、この「文武不岐」を目指した藩校改革は翌年頃には頓挫したとされる<sup>32)</sup>。師役御免への流れも含め、従来の武芸稽古と藩軍制の洋式化の動向を総体的に捉えることが大きな課題となるであろう。

### 注

- 1) 「福井新聞」大正2年5月21日～27日の連載記事「史談 福井城の今昔（廿八～三四）」同連載は写本からの翻刻が『福井藩史話－福井城の今昔（上・下）』（歴史図書社、1975年）として刊行されており、同書「解説」（舟沢茂樹）では、連載に「松平侯爵家の蔵本が、豊富に駆使されている」点が指摘されている。
- 2) 『稿本福井市史 下巻』（福井市、1941年）pp.136-162「第三篇 兵制」の「一 藩政時代の兵制（第五章 兵学二流）」および「二 藩政時代の諸武芸（第一章 弓術～第七章 馬術）」。
- 3) 『続片聳記 下』（福井県立図書館、1957年）pp.235-284。なお、本稿では福井市立郷土歴史博物館ウェブサイト「デジタル原本『続片聳記』」で画像を参照し、適宜翻刻文を改めた。
- 4) 鈴木準道著、舟沢茂樹校訂『福井藩史事典』（歴史図書社、1977年）pp.348-355「武芸師範諸家〔諸師範家先祖由緒人名書〕」。
- 5) 『藩史大事典 第3巻 中部編I－北陸・甲信越』（雄山閣出版、1989年）pp.256-257「藩の武術」（舟沢茂樹）。
- 6) 『福井県史 通史編4 近世二』（福井県、1996年）pp.641-643「福井藩の軍学と武芸」（岡田要）。
- 7) 『福井市史 通史編2 近世』（福井市、2008年）pp.430-434「義経流軍学と武田流軍学」「さまざまな武芸」（西村英之）。

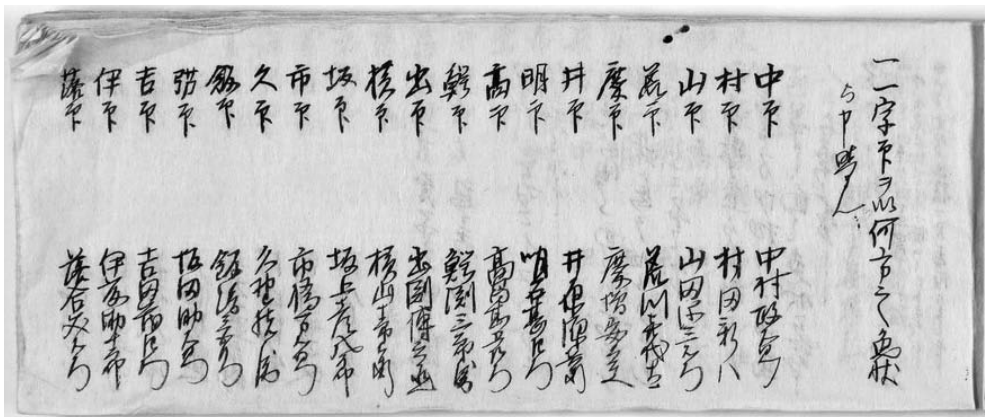
- 8) このほかの表記の揺れに、剣術の新影松田方幕屋流 (b,c,d,f) / 新影流松田形幕屋流 (a) / 新影幕屋流 (e) / 新陰幕屋流 (g)、鎗術の「宝蔵院流十文字鎌 (d) / 宝蔵院十文字鎌 (c) / 宝蔵院流 (b,e,f,g)、鎗術の無辺流 (b,c,d,e,f,g) / 大内無辺流 (a)、鎗術の五坪流 (a,c,d,f,g) / 五ノ坪流 (b,e)、弓術の日置伝来吉田派 (c) / 日置伝来吉田流 (a) / 日置流印西派 (f) / 印西流 (d,e) / 印西派 (b,c,g)、弓術の竹林流 (a,d,e) / 日置流竹林派 (f) / 竹林派 (b,c,g)、弓術の道雪流 (a,d,e) / 日置流道雪派 (f) / 道雪派 (b,c,g) が確認された。
- 9) 「寛政 諸事御用留拔書下書 十」(A0143-02417) 寛政4年12月14日条には、家老の岡部左膳から御用人多賀谷権兵衛に対し、「諸師家之面々、芸術ニ取規模之義惣而由緒書御吟味可被仰付候事」「御家中之面々、諸稽古所ニ而印可相極候芸術之分ハ書出候様御吟味可被仰付候事」の2つが命じられている。
- 10) 宇田川武久「旗本本多家武芸関係資料の紹介」(『国立歴史民俗博物館研究報告』83集、2000年)。
- 11) 注7『福井市史 通史編2』(g) 収載の「表93 寛政5年(1793) 福井藩の武芸師家」は、この寛政4年末段階の師役を示すものであるが、槍術「五坪流 山田彦三」と砲術「自由齋流 津田八郎左衛門」が脱漏している。また「越藩諸師家由緒記」を典拠にしているため、剣術の「新影松田方幕屋流」が「新陰幕屋流」、砲術の「極寄流」が「極気流」と誤記されている。なお、兵学は別項で言及されたため本表には記載がない。
- 12) 『越前松平家家譜 慶永1～5』(福井県文書館、2010～11年)。
- 13) 『福井藩士履歴 1～10』(福井県文書館、2013～22年)。
- 14) 『奉答紀事－春嶽松平慶永実記』(東京大学出版会、1980年)。なお、本稿ではデジタルアーカイブ福井の画像(A0143-01260)を参照し、適宜翻刻文を改めた。
- 15) 『続片聳記 中』(福井県立図書館、1956年)。
- 16) 拙稿「剣士としての佐々木権六－福井藩における「長剣術」導入との関連で」(『福井県史研究会会報』No.7、2014年)。
- 17) 『福井市史 資料編6 近世四下』(福井市、1999年) 1215号「御家流砲術派立ニ付達」・1216号「同」。
- 18) 「文武」の袋に入った資料については、「(九頭竜川河口絵図)」(A0143-02479-034)を検討した平野俊幸「松平文庫「九頭竜川河口絵図」について」(『若越郷土研究』52巻2号、2008年)、「辰卅六」(嘉永5子年7月23日支合覚他)」(A0143-02479-018～021)を主題とした注16拙稿「剣士としての佐々木権六」がある。
- 19) 『福井県史 資料編3 中・近世一』(福井県、1982年)。
- 20) 「給禄高控(明治初年)」(『武生越前府中本多家家臣録(二)』丹南史料研究会、1994年)。
- 21) 舟澤茂樹「福井藩における陪臣について」(『福井県地域史研究』10号、1989年)所載「酒井家陪臣録」。
- 22) 「菅沼家譜代家来ノ記」(菅沼家文書(福井県文書館寄託) A0206-00060)。
- 23) 三岡丈夫編『由利公正伝』(光融館、1916年) pp.10-11「一日、武術の古老、島津波静<sup>年八十八</sup>村田の道場に來り觀る。村田、座に請し、石五郎をして、佐々木権六<sup>後長淳と改む</sup>と技を角せしむ。事終りて後、島津曰く、余は三岡氏の曾祖父次郎左衛門武樹氏の門人なり。武樹先生は、槍法に於ける非凡の名人にして、村田家の先師弟右衛門氏も、亦武樹先生の教を受けたり、島津右大夫、佐野内十兵衛、平田幾良右衛門氏等、亦皆其の門より出て、名人と成れり」。ここに「先師弟右衛門氏」とあるも、安永3年(1774)に49歳で没した次郎左衛門に、文化13年(1816)家督相続時に「鎗指南」を命じられた弟右衛門(忠典)が教を受けることは難しいことから、このくだりは本書に多く見られる記憶違いの類であろう。『藩士履歴』等の記載より、次郎左衛門の教を受けたのは「先々々師の安右衛門」と判断できる。なお「弘化四丁未歳正月ヨリ同年三月十八日迄 御用日記」(宮崎長円家文書 A0180-00001) 2月9日条には「右大夫養父休息鳴津波静」が松平慶永に「米寿餅壺箱」を献上した記事が見え(柳沢美美子「鈴木主税の弘化四年『御用日記』」『福井県文書館研究紀要』12号、2015年)、上掲の「年八十八」の記載と一致することより、本逸話は弘化4年のものと判断した。
- 24) 『片聳記・続片聳記 上』(福井県立図書館、1955年)。
- 25) 『覚(学塾覚)』には「三十五六人 前田彦次郎(梅洞)」「二十人斗 高野半右衛門(真斎)」「四十人斗 荒川小三郎(汶水)」「三十四五人 田川清介」「二十人 岸田藤次」「二十人 内藤彦左衛門」「百四五十人 伴圭左衛門(閑山)」「三十人斗 覚兵衛養子 末松嘉十郎」「二十人 剛右衛門弟 三寺三作」「三十人斗 小役人奥右衛門 倅 山本平太郎(木齋)」「二百人斗 御書物方御坊主勤 吉田梯蔵(東篁)」「二十九人 佐々木小左衛門組 牧田順

蔵」との記載があり、私塾ごとの門人数が把握できる（括弧内の号は筆者が補記した）。

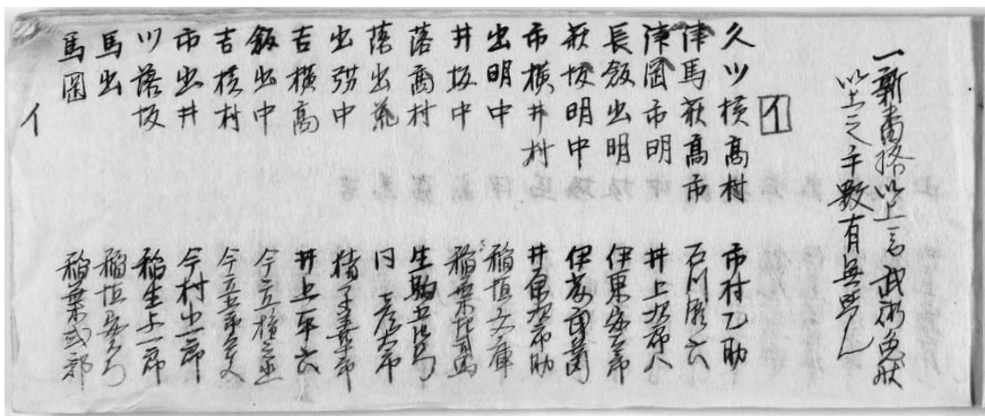
- 26) 『日本史小百科（武道）』（東京堂出版、1994年）所載「諸流の分派と免許制度の発達」（二木謙一）。
- 27) 『国史大辞典 7』（吉川弘文館、1986年）の「柔道」の項（島田貞一）。
- 28) 注20『武生越前府中本多家家臣録（二）』所載。
- 29) 拙稿「松旭斎天一と福井藩陪臣牧野家－再読『松旭斎天一の生涯』」（『若越郷土研究』56巻2号、2012年）。
- 30) 「松旭斎天一の話」（『新古文林』1巻5号、1905年）。
- 31) 青園謙三郎『松旭斎天一の生涯－奇術師一代』（品川書店、1976年）所載。
- 32) 高木不二「越前藩安政改革について－学校政策を中心に」（『史学』51巻3号、1981年）。



図版1 「取調書」表紙



図版2 「取調書」師役姓名と一字印（部分）



図版3 「取調書」第1グループ冒頭

別表 嘉永2年武術免状取得一覽

\* 姓名の明らかな転り(修正した)  
 \*\* 家格・身分の別に当主と子弟の別を記し、誰の子弟か特定できた場合はその当主のNo.を示した

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
1	市村乙助	中士 役番外	村2		高	横	久				
2	石川順六	中士 番士(大番)	当主		高		市	萩	津2	馬	
3	井上次郎八	中士 番士(留守番)	当主				市	圓2	津		
4	伊東安太郎	中士 番士(大番)	当主					飯	長		
5	伊藤武兵衛	中士 番士(大番)	中					坂2			
6	井原次郎助	中士 番士(書院番)	当主	井2			市	萩			
7	稲垣文庫	上士 寄合席	17	明		出					
8	稲葉左司馬	上士 寄合席	18	明		出					
9	生駒五左衛門	中士 役番外	当主	井	高2	坂		落			
10	同 彦太郎	中士 役番外	当主	荒2		出		落			
11	猪子善十郎	中士 番士(小姓)	当主	中	高	横		吉			
12	井上平六	中士 番士(大番)	当主			出		飯			
13	今立権之丞	中士 番士(大番)	当主	中	高	横		吉			
14	今立五郎太夫	中士 番士(大番)	当主	村		横		吉			
15	今村小一郎	中士 番士(大番)	当主	井		出	市				
16	稲生与一郎	中士 番士(大番)	当主			坂		落	ソ		
17	稲垣安右衛門	上士 寄合席	当主			出				馬	
18	稲葉式部	上士 寄合席	当主					岡		馬	
19	市橋政藏	中士 番士(書院番)	当主	慶	高						
20	猪子丈右衛門	中士 番士(小姓)	当主	村							
21	市橋文太夫	中士 番士(大番)	当主	山2				伊	長		
22	今立立太夫	中士 番士(大番)	当主					飯			
23	飯尾惣太夫	中士 番士(留守番)	当主			出		伊			
24	生田祐三郎	中士 番士(大番)	当主	中		横					▲
25	雪吹牛兵衛	中士 番士(留守番)	当主	中2			市2				
26	飯田十太夫	上士 寄合席	当主								
27	市村勘右衛門	中士 役番外	当主	荒				吉			
28	石原甚十郎	中士 役番外	当主		高			サ			
29	村上繩太夫	中士 役番外	当主								
30	同 鏡五郎	中士 役番外	当主	29				伊		馬	
31	石川弥五太夫	中士 役番外	当主								
32	生駒弥五右衛門	中士 役番外	当主			坂2					
33	同 吉次郎	中士 役番外	当主	32		坂					
34	井戸治兵衛	中士 番士(書院番)	当主	中							
35	井上弥一郎	中士 番士(小姓)	当主		鰐						
36	井上三太郎	中士 番士(大番)	当主					萩			
37	飯尾惣市	中士 番士(留守番)	当主			出					
38	伊藤弥三郎	中士 番士(留守番)	当主			出					
39	岩村他三郎	中士 番士(大番)	当主						長		
40	飯沼源左衛門	中士 番士(大番)	当主				久2				
41	井上定右衛門	中士 番士(留守番)	当主	山							
42	雪吹弥太郎	中士 番士(留守番)	当主	25			市				
43	市村八太郎	中士 番士(留守番)	当主	62							
44	同 三吉	中士 番士(留守番)	当主	62				久			
45	伊藤啓次郎	中士 新番	当主								
46	石沢忠右衛門	中士 新番	当主						宇2		
47	市村与八郎	中士 新番	当主	村							
48	今川七左衛門	中士 番士(大番)	当主		高						
49	稲葉政次郎	上士 高知席	当主								
50	磯野石見	上士 寄合席	当主								

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
51	弟 他五郎	上士 寄合席	50								
52	岩城藤左衛門	中士 役番外	当主								
53	同 源太郎	中士 役番外	52								
54	磯野鉄平	中士 番士(留守番)	当主								
55	今立猪三郎	中士 番士(大番)	22								
56	伊藤鑰太郎	中士 番士(大番)	5								
57	伊藤謙太郎	中士 番士(留守番)	38								
58	飯沼太郎吉	中士 番士(大番)	40								
59	石川定之助	中士 番士(大番)	2								
60	稲葉源右衛門	中士 番士(大番)	当主								
61	石井熊吉	中士 番士(留守番)	当主								
62	市村三右衛門	中士 番士(留守番)	当主								
63	市嶋百助	中士 番士(留守番)	当主								
64	井上金次郎	中士 番士(留守番)	当主								
65	岩佐七九郎	中士 新番	当主								
66	伊藤清八郎	下士 新番格	当主								
67	同 新八	下士 新番格	66								
68	今川鳳次郎	中士 番士(大番)	48								
69	今村重太郎	中士 番士(大番)	当主								
70	井原庸之助	中士 番士(書院番)	6								
71	伊藤友四郎	中士 番士(留守番)	当主								
72	原平五衛門	中士 役番外	当主	村				飯	津		
73	同 甚太郎	中士 役番外	72	明				萩	津		
74	花本石門	上士 定座番外席	当主	中	高			落			
75	長谷部甚平	中士 役番外	当主	荒							
76	服部三郎兵衛	中士 役番外	当主	明				横			
77	萩原金兵衛	中士 番士(小姓)	当主					横	長2	馬	
78	林五右衛門	中士 番士(大番)	当主	荒	高		市				
79	伴五郎左衛門	中士 番士(留守番)	当主	慶	高						
80	長谷川善兵衛	中士 新番	当主	慶	高						
81	波々伯部熊藏	上士 定座番外席	当主		鰐			萩	ソ		
82	長谷部熊藏	中士 役番外	75	荒				萩			
83	林右忠太	中士 番士(大番)	当主	中							
84	畑中藤八郎	中士 役番外	当主					萩			
85	林作助	中士 番士(書院番)	当主	村2				坂	久2		
86	原田甚五左衛門	中士 番士(書院番)	当主					出	久		
87	波々伯部源右衛門	中士 番士(大番)	当主							馬	
88	服部三郎左衛門	中士 番士(大番)	当主								
89	長谷川次郎左衛門	中士 番士(大番)	当主	中				萩	ソ		
90	林八右衛門	上士 寄合席	当主					伊			
91	畑中順之助	中士 役番外	84		高						
92	服部甚三郎	中士 役番外	76	中							
93	長谷部作内	中士 番士(書院番)	当主						長		
94	林勘十郎	中士 番士(書院番)	当主	明							
95	波多野儀平	中士 番士(小姓)	当主								
96	同 方三郎	中士 番士(小姓)	95					鰐			
97	波々伯部十郎三郎	中士 番士(大番)	87					鰐			
98	原田小十郎	中士 番士(大番)	当主	中							
99	林与太夫	中士 番士(大番)	当主					横			
100	林弥兵衛	中士 番士(大番)	当主								ソ

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
151	堀連之助	中士 番士(小姓) 当主									
152	堀江源三郎	中士 番士(書院番) 142									
153	堀十吉	中士 番士 146									
154	本多直四郎	中士 番士(留守番) 当主									
155	本多猪太郎	中士 番士(大番) 当主									
156	堀甚十郎	中士 番士(大番) 当主									
157	堀江戸十郎	中士 新番 当主									
158	星野友次郎	中士 番士(大番) 143									
159	東郷平太夫	中士 役番外 当主									
160	戸田弥太郎	中士 新番 当主									
161	富永新左衛門	上士 寄合席 当主									●
162	富永三之助	上士 寄合席 161									
163	東郷三郎右衛門	中士 番士(大番) 当主									
164	戸枝市郎兵衛	中士 番士(留守番) 当主									
165	富田四郎	中士 番士(大番) 当主									
166	戸枝彦作	中士 番士(留守番) 164									
167	徳山茂左衛門	中士 新番 当主									
168	同 鉄太郎	中士 新番 167									
169	富永延次郎	上士 寄合席 161									
170	初屋政之助	中士 番士(大番) 175									
171	小栗秋之丞	中士 役番外 175									
172	岡部造酒	上士 高知席 当主									
173	太田三郎兵衛	中士 役番外 当主									
174	大谷清三郎	中士 役番外 196									
175	小栗岩右衛門	中士 役番外 当主									
176	大谷半平	中士 役番外 当主									▲
177	小栗三次郎	中士 番士(書院番) 当主									
178	大宮藤馬	上士 寄合席 当主									
179	太田熊藏	中士 役番外 173									
180	岡田喜八郎	中士 役番外 当主									
181	岡長之助	中士 番士(書院番) 198									
182	大越篤左衛門	中士 番士(書院番) 当主									
183	大岡新五左衛門	中士 役番外 当主									
184	同 石太郎	中士 役番外 183									
185	岡田弥一郎	中士 役番外 215									
186	織田仁九郎	中士 役番外 220									
187	同 欽一	中士 役番外 220									
188	岡部半兵衛	中士 番士(小姓) 当主									
189	荻野太治右衛門	中士 番士(留守番) 当主									
190	大谷八十郎	中士 番士(留守番) 当主									
191	大町岩太郎	中士 番士(留守番) 210									
192	大橋金兵衛	中士 番士(留守番) 当主									▲
193	小野庄助	中士 番士(留守番) 当主									
194	大谷助六	上士 高知席 当主									
195	大宮左金吾	上士 定座番外席 当主									
196	大谷藤左衛門	中士 役番外 当主									
197	荻野左十郎	中士 役番外 214									
198	岡十次兵衛	中士 番士(書院番) 当主									
199	岡谷弥右衛門	中士 役番外 当主									
200	同 鉄吉	中士 役番外 199									

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
101	羽中田藤兵衛	中士 番士(留守番) 当主									
102	八田喜内	中士 番士(大番) 当主									
103	萩原左一郎	中士 番士(書院番) 当主									
104	原田清七郎	中士 番士(大番) 当主									
105	伴圭左衛門	中士 新番 当主									
106	花木壮太郎	上士 定座番外席 74									
107	林外吉	中士 番士(大番) 83									
108	長谷部佐太郎	中士 番士(書院番) 93									
109	波々伯殿一右衛門	中士 番士(書院番) 当主									
110	同 銀吉	中士 番士(書院番) 109									
111	林久太郎	中士 番士(書院番) 85									
112	林久太郎	中士 番士(小姓) 当主									
113	波々伯殿仙吉	中士 番士(大番) 87									
114	同 甚吉	中士 番士(大番) 87									
115	波々伯殿小金吾	中士 番士(大番) 当主									
116	服部弥之進	中士 番士(大番) 当主									
117	波々伯殿俊助	中士 番士(大番) 当主									
118	服部弥太郎	中士 番士(留守番) 当主									
119	通川仁兵衛	中士 番士(留守番) 当主									●
120	西尾五右衛門	中士 番士(大番) 当主									
121	西村又三郎	中士 番士(大番) 当主									
122	西尾久作	上士 寄合席 当主									
123	丹羽与右衛門	中士 役番外 当主									
124	髭川長助	中士 番士(小姓) 当主									
125	西村勘五兵衛	中士 番士(大番) 当主									
126	丹羽十左衛門	中士 番士(留守番) 当主									
127	西村源左衛門	中士 新番 当主									
128	菲塚庄右衛門	中士 番士(大番) 当主									
129	西脇甚五太夫	中士 番士(大番) 133									
130	西村閑次郎	中士 新番 127									
131	西村閑次郎	中士 番士(大番) 125									
132	丹羽辰五郎	中士 役番外 123									
133	西脇林右衛門	中士 番士(大番) 当主									
134	新海岩次郎	中士 番士(留守番) 当主									
135	西村平左衛門	中士 新番 当主									
136	本多五郎右衛門	上士 定座番外席 当主									▲
137	本多肇	上士 高知席 当主									
138	本多四郎右衛門	中士 高知席 当主									
139	本多十郎兵衛	中士 役番外 当主									
140	堀権之助	中士 番士(大番) 当主									
141	堀武左衛門	中士 番士(大番) 当主									
142	堀江九郎左衛門	中士 番士(書院番) 当主									
143	星野織之助	中士 番士(大番) 当主									
144	本多源四郎	上士 高知席 138									
145	堀新左衛門	中士 番士(留守番) 当主									
146	堀又七	中士 番士(大番) 当主									
147	堀鉄藏	中士 番士(留守番) 当主									
148	堀十左衛門	中士 番士(留守番) 当主									
149	本多七平	中士 番士(留守番) 当主									
150	本多茂吉	上士 定座番外席 136									

No.	姓名	家格・身分	資格・身分	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
251	大井長十郎	中士 番士(小姓)	当主	大井長十郎	中士 番士(小姓)	中								
252	大河原喜三太	中士 番士(大番)	224	大河原喜三太	中士 番士(大番)	村2	井			久				
253	尾高虎吉	中士 番士(大番)	205	尾高虎吉	中士 番士(大番)	中					伊			
254	奥村桐之丞	中士 番士(大番)	229	奥村桐之丞	中士 番士(大番)	中					伊			
255	同 和三郎	中士 番士(大番)	229	同 和三郎	中士 番士(大番)	中				久				
256	岡嶋清太夫	中士 新番	当主	岡嶋清太夫	中士 新番	中					岡			
257	同 勝助	中士 新番	256	同 勝助	中士 新番	中								
258	大谷源吉	中士 新番	213	大谷源吉	中士 新番	中	慶							
259	渡辺三吉	上士 定座番外席	260	渡辺三吉	上士 定座番外席	中				市	吉			馬
260	渡辺元十郎	上士 定座番外席	当主	渡辺元十郎	上士 定座番外席	中			出					馬
261	渡辺元右衛門	中士 番士(大番)	当主	渡辺元右衛門	中士 番士(大番)	中			出					
262	渡辺仁助	中士 新番	当主	渡辺仁助	中士 新番	山			坂					
263	渡辺算右衛門	中士 新番	当主	渡辺算右衛門	中士 新番	中				市				
264	若森元四郎	中士 新番	268	若森元四郎	中士 新番	中	明							
265	渡辺左右衛門	中士 役番外	当主	渡辺左右衛門	中士 役番外	中					吉2			
266	渡辺元之助	中士 番士(大番)	261	渡辺元之助	中士 番士(大番)	中					伊			
267	渡辺基太夫	中士 新番	263	渡辺基太夫	中士 新番	中					伊			
268	若森才太夫	下士 新番格	当主	若森才太夫	下士 新番格	中					吉			
269	渡辺利右衛門	下士 新番格	当主	渡辺利右衛門	下士 新番格	中				久				
270	同 良助	下士 新番格	269	同 良助	下士 新番格	中							津	
271	川村文平	中士 役番外	当主	川村文平	中士 役番外	中					伊			
272	加藤所左衛門	中士 番士(大番)	当主	加藤所左衛門	中士 番士(大番)	山								
273	川村忠次郎	中士 役番外	271	川村忠次郎	中士 役番外	中								
274	加藤文太	中士 役番外	275	加藤文太	中士 役番外	中			坂					
275	加藤茂右衛門	中士 役番外	当主	加藤茂右衛門	中士 役番外	中								
276	梶川半兵衛	中士 番士(書院番)	当主	梶川半兵衛	中士 番士(書院番)	中						宇2		
277	川村五右衛門	中士 番士(大番)	当主	川村五右衛門	中士 番士(大番)	中				市				
278	鱒江十太夫	中士 番士(大番)	当主	鱒江十太夫	中士 番士(大番)	中			出					
279	相谷彦左衛門	中士 番士(大番)	当主	相谷彦左衛門	中士 番士(大番)	中			横					
280	勝木権太夫	中士 番士(大番)	当主	勝木権太夫	中士 番士(大番)	中				市				
281	加藤長右衛門	中士 番士(大番)	当主	加藤長右衛門	中士 番士(大番)	中								
282	川地半九郎	中士 番士(大番)	当主	川地半九郎	中士 番士(大番)	中				市				
283	加藤武右衛門	中士 番士(留守番)	当主	加藤武右衛門	中士 番士(留守番)	中				市				
284	同 八郎助	中士 番士(留守番)	284	同 八郎助	中士 番士(留守番)	中				市				
285	勝山七右衛門	中士 番士(留守番)	当主	勝山七右衛門	中士 番士(留守番)	中					伊			
286	河村三左衛門	中士 番士(留守番)	当主	河村三左衛門	中士 番士(留守番)	中						宇2		
287	加藤佐左衛門	中士 番士(留守番)	当主	加藤佐左衛門	中士 番士(留守番)	中			坂					
288	河村三左衛門	中士 番士(留守番)	当主	河村三左衛門	中士 番士(留守番)	中								
289	加藤長吉	中士 役番外	336	加藤長吉	中士 役番外	中								
290	梶川沢之丞	中士 役番外	276	梶川沢之丞	中士 役番外	中								
291	葛巻源三郎	中士 番士(書院番)	当主	葛巻源三郎	中士 番士(書院番)	中								
292	川合五右衛門	中士 番士(書院番)	当主	川合五右衛門	中士 番士(書院番)	中								
293	川村乙三郎	中士 番士(書院番)	当主	川村乙三郎	中士 番士(書院番)	中								
294	金子十郎平	中士 番士(小姓)	当主	金子十郎平	中士 番士(小姓)	中								
295	鱒江彦助	中士 番士(大番)	278	鱒江彦助	中士 番士(大番)	中								
296	片山直次郎	中士 番士(大番)	当主	片山直次郎	中士 番士(大番)	中								
297	河合久左衛門	中士 番士(大番)	当主	河合久左衛門	中士 番士(大番)	中			出					
298	川地権内	中士 番士(留守番)	当主	川地権内	中士 番士(留守番)	中								
299	加納平右衛門	中士 番士(留守番)	当主	加納平右衛門	中士 番士(留守番)	中								
300	寛弥左衛門	中士 新番	当主	寛弥左衛門	中士 新番	中			坂					

No.	姓名	家格・身分	資格・身分	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
201	大関彦兵衛	中士 番士(書院番)	当主	大関彦兵衛	中士 番士(書院番)	中								
202	大越五郎作	中士 番士(書院番)	182	大越五郎作	中士 番士(書院番)	中	井			久				
203	岡半右衛門	中士 番士(大番)	当主	岡半右衛門	中士 番士(大番)	村2								
204	小川六太夫	中士 番士(大番)	当主	小川六太夫	中士 番士(大番)	中					伊			
205	尾高仁兵衛	中士 番士(大番)	当主	尾高仁兵衛	中士 番士(大番)	中					伊			
206	大野権之助	中士 番士(大番)	225	大野権之助	中士 番士(大番)	中				久				
207	小栗源藏	中士 番士(大番)	当主	小栗源藏	中士 番士(大番)	中					岡			
208	小野太郎太夫	中士 番士(大番)	当主	小野太郎太夫	中士 番士(大番)	中	慶							
209	大内彦十郎	中士 番士(大番)	当主	大内彦十郎	中士 番士(大番)	中				市	吉			馬
210	大町左衛門	中士 番士(留守番)	当主	大町左衛門	中士 番士(留守番)	中			出					
211	岡嶋左太夫	中士 番士(留守番)	当主	岡嶋左太夫	中士 番士(留守番)	中			出					
212	同 左久助	中士 番士(留守番)	211	同 左久助	中士 番士(留守番)	山			坂					
213	大谷孫右衛門	中士 新番	当主	大谷孫右衛門	中士 新番	中				市				
214	萩野治郎左衛門	中士 役番外	当主	萩野治郎左衛門	中士 役番外	中								
215	岡田金左衛門	中士 役番外	当主	岡田金左衛門	中士 役番外	中	明							
216	小川治兵衛	中士 役番外	当主	小川治兵衛	中士 役番外	中					吉2			
217	小栗算三郎	中士 役番外	244	小栗算三郎	中士 役番外	中					伊			
218	大久保太郎太夫	中士 役番外	当主	大久保太郎太夫	中士 役番外	中					吉			
219	織田金左衛門	中士 番士(書院番)	当主	織田金左衛門	中士 番士(書院番)	中								
220	織田半左衛門	中士 役番外	当主	織田半左衛門	中士 役番外	中				久				
221	大嶋七太夫	中士 番士(小姓)	当主	大嶋七太夫	中士 番士(小姓)	中							津	
222	岡嶋恒之助	中士 番士(大番)	当主	岡嶋恒之助	中士 番士(大番)	中					伊			
223	大久保元作	中士 番士(大番)	当主	大久保元作	中士 番士(大番)	山								
224	大河原助右衛門	中士 番士(大番)	当主	大河原助右衛門	中士 番士(大番)	中			坂					
225	大野三左衛門	中士 番士(大番)	当主	大野三左衛門	中士 番士(大番)	中								
226	大谷第八	中士 番士(留守番)	当主	大谷第八	中士 番士(留守番)	中								
227	大久保善十郎	中士 番士(大番)	当主	大久保善十郎	中士 番士(大番)	中				市				
228	大河原作左衛門	中士 番士(大番)	当主	大河原作左衛門	中士 番士(大番)	中			出					
229	奥村九助	中士 番士(大番)	当主	奥村九助	中士 番士(大番)	中			横					
230	岡田外太郎	中士 番士(留守番)	当主	岡田外太郎	中士 番士(留守番)	中				市				
231	大井田幾次郎	中士 番士(大番)	当主	大井田幾次郎	中士 番士(大番)	中								
232	大内捨作	中士 番士(大番)	209	大内捨作	中士 番士(大番)	中				市				
233	小川茂兵衛	中士 番士(大番)	当主	小川茂兵衛	中士 番士(大番)	中				市				
234	同 時次郎	中士 番士(大番)	233	同 時次郎	中士 番士(大番)	中				市				
235	大平藤次郎	中士 番士(留守番)	当主	大平藤次郎	中士 番士(留守番)	中				市				
236	大木与右衛門	中士 番士(留守番)	当主	大木与右衛門	中士 番士(留守番)	中								
237	大久保惣兵衛	中士 新番	237	大久保惣兵衛	中士 新番	中					伊			
238	同 金太郎	中士 新番	237	同 金太郎	中士 新番	中			坂					
239	大野宗太夫	上士 高知席	172	大野宗太夫	上士 高知席	中								
240	岡部長十郎	上士 高知席	194	岡部長十郎	上士 高知席	中								
241	大谷英之進	上士 高知席	当主	大谷英之進	上士 高知席	中								
242	森野小四郎	中士 役番外	216	森野小四郎	中士 役番外	中								
243	小川源五郎	中士 役番外	当主	小川源五郎	中士 役番外	中								
244	小栗仁右衛門	中士 役番外	176	小栗仁右衛門	中士 役番外	中								
245	大谷徳太郎	中士 役番外	218	大谷徳太郎	中士 役番外	中								
246	大久保惟八	中士 番士(留守番)	当主	大久保惟八	中士 番士(留守番)	中								
247	小嶋逸八	中士 番士(留守番)	247	小嶋逸八	中士 番士(留守番)	中								
248	同 留吉	中士 番士(留守番)	247	同 留吉	中士 番士(留守番)	中								
249	大関弥三郎	中士 番士(書院番)	201	大関弥三郎	中士 番士(書院番)	中								
250	織田新左衛門	中士 番士(書院番)	219	織田新左衛門	中士 番士(書院番)	中								

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
351	吉田石五郎	中士 役番外					久	サ			
352	横井芳吉	中士 番主 (大番)	村	井		出	久			馬	
353	吉池角左衛門	中士 番主 (留守番)	村	井		出			長		
354	吉倉鉄五郎	中士 番主 (大番)	村			出					
355	横井三郎右衛門	中士 番主 (大番)	山		高		久	落			
356	吉田新六	中士 役番外						サ			
357	吉田五左衛門	中士 番主 (大番)	山								
358	吉田伝右衛門	中士 番主 (留守番)	山				市				
359	吉田祐藏	中士 番主 (留守番)					市				
360	弟 猶次郎	中士 番主 (留守番)									
361	横山吉次夫	中士 番主 (大番)					久		字		
362	吉樹源藏	中士 番主 (大番)									
363	吉田新左衛門	中士 番主 (大番)			高						
364	吉岡孫太夫	中士 番主 (大番)								馬	
365	吉田猪兵衛	中士 番主 (大番)							字		
366	横田藤九郎	中士 役番外									
367	横井吉十郎	中士 番主 (書院番)					350				
368	吉田忠太郎	中士 番主 (大番)					358				
369	吉田捨六	中士 番主 (留守番)									
370	米岡源太郎	中士 番主 (留守番)									
371	吉池角兵衛	中士 番主 (留守番)					353				
372	高木庄右衛門	中士 番主 (大番)	慶	井		坂2		萩	ソ		
373	田辺良助	中士 役番外	村								
374	高村新五兵衛	中士 番主 (書院番)	中		高			落		馬	
375	高松彦藏	中士 番主 (大番)	村					萩		馬	
376	竹沢五郎右衛門	中士 番主 (大番)	中			出2		サ	字2		
377	高嶋仲右衛門	中士 番主 (大番)	慶				久	吉			
378	高松仙右衛門	中士 番主 (留守番)		井		横	市2			馬	
379	田辺五太夫	中士 役番外	村					萩			
380	高村藤兵衛	中士 役番外	荒							馬	
381	高嶋与五郎	中士 役番外	中				397	久			
382	高嶋与五郎	中士 役番外	中			出		飯		馬	
383	武田百助	中士 [番主]	中			横	市				
384	田中勘助	中士 番主 (書院番)	中	明		横2					
385	武部作太夫	中士 番主 (大番)	中	明		出		吉			
386	高田孫十郎	中士 番主 (大番)		明				落			
387	高橋左十郎	中士 番主 (留守番)	山				久	サ	字		
388	高階市之丞	中士 番主 (留守番)	慶			出					
389	高須幸八	中士 番主 (大番)	慶	井	高2						
390	高屋権太郎	中士 番主 (留守番)	中	井	鰐					馬	
391	高田敏吉	中士 番主 (留守番)	上士 高合席			坂	久			馬	
392	多賀谷舍人	上士 高合席	荒							馬	
393	弟 雅吉	中士 役番外	中				392			馬	
394	大藤治兵衛	中士 役番外	中				当主	伊		馬	
395	高江友右衛門	中士 役番外					当主	久		馬	
396	回 他三郎	中士 役番外				出			字2		
397	高嶋市郎右衛門	中士 役番外	村			出			字2		
398	高野半右衛門	中士 番主 (書院番)	慶				当主				●
399	高橋吉兵衛	中士 番主 (大番)	中				当主				
400	田辺謙右衛門	中士 番主 (大番)	村				当主	市			

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
301	上月右衛門	中士 番主 (書院番)									
302	高坂武右衛門	中士 役番外	荒			出			長		
303	香西山三郎	中士 役番外	村	井		横					
304	河合藤左衛門	下士 新番格	慶			横					
305	海福久次郎	上士 定座番外席						サ			
306	海福猪兵衛	中士 役番外	村								●
307	加藤伝内	中士 役番外									
308	川瀬次郎右衛門	中士 役番外					市2				
309	河津佐太夫	中士 役番外						サ			
310	同 孫十郎	中士 役番外		井		横					
311	梯五思太	中士 役番外									
312	川合太郎太夫	中士 番主 (書院番)					市				
313	勝木十藏	中士 番主 (書院番)									
314	金子平次郎	中士 番主 (小姓)	294			出		伊			
315	河合滝五郎	中士 番主 (大番)	297								
316	河崎三郎助	中士 番主 (大番)	339					吉			
317	笠原平八郎	中士 番主 (大番)	当主	慶							
318	河合次郎左衛門	中士 番主 (大番)	当主				久				
319	金子六右衛門	中士 番主 (大番)	当主				市				
320	同 小太郎	中士 番主 (大番)	319		鰐						
321	金子小銀太	中士 番主 (大番)	当主					伊			
322	加藤仁九助	中士 [番主]	中士 子弟			横					
323	川崎仁右衛門	中士 番主 (留守番)	当主								
324	川地平藏	中士 番主 (留守番)	298					萩			
325	川端小作	中士 番主 (留守番)	当主				久				
326	片山藤十吉	中士 番主 (留守番)	当主				久				
327	加藤勝太郎	中士 番主 (留守番)	当主								
328	藤田与右衛門	中士 新番	当主				市				
329	高坂源五郎	中士 役番外	302	荒2							
330	香西益太郎	中士 役番外	当主								
331	海福綱三郎	中士 役番外	306								
332	門野太郎右衛門	中士 役番外	当主								
333	同 彦之丞	中士 役番外	332								
334	加藤常之助	中士 役番外	307								
335	川瀬孫太郎	中士 役番外	308								
336	加藤清兵衛	中士 役番外	当主								
337	川村虎作	中士 [番主]	子弟								
338	加賀敏吉	中士 番主 (大番)	当主								
339	河崎清兵衛	中士 番主 (大番)	当主								
340	川崎平三郎	中士 番主 (大番)	当主								
341	同 金次郎	中士 番主 (大番)	340								
342	川崎栄太郎	中士 番主 (大番)	当主								
343	加藤又一郎	中士 番主 (大番)	当主								
344	勝山藤五郎	中士 番主 (留守番)	286								
345	門野八十之丞	中士 新番	当主								
346	勝田拾藏	中士 新番	328								
347	加藤佐太郎	中士 新番	287								
348	上月八郎左衛門	中士 役番外	当主								
349	同 久三郎	中士 役番外	348								
350	横田作太夫	中士 役番外	当主	中	高					馬	

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
451	竹信徳太郎	中士 番士(大番)	427								
452	園田藤左衛門	中士 番士(書院番)	当主	明		横		寸			
453	同 岩六	中士 番士(書院番)	452								
454	土屋十郎右衛門	中士 役番外	当主	明2	高			飯	津2	馬	▲
455	同 小六	中士 役番外	454	明	高2	横			津	馬	
456	津田弥三郎	中士 役番外	468	村	高	横		落	津		
457	榎植平太夫	中士 番士(大番)	当主	明				寸			
458	津田四郎太夫	中士 番士(留守番)	当主						津	馬	
459	堀七太夫	中士 番士(大番)	当主				久				
460	土多忠次郎	中士 番士(留守番)	当主		鱈						
461	津田友右衛門	中士 番士(書院番)	当主					寸			
462	稻植千蔵	中士 番士(大番)	457								
463	津田三作	中士 番士(留守番)	当主						字		
464	土屋八左衛門	中士 番士(大番)	当主						筒		
465	稲笠利八郎	中士 番士(留守番)	当主				久				
466	恒岡安左衛門	上士 寄合席	当主								
467	弟 奈吉	上士 寄合席	466								
468	津田弥太六	中士 役番外	当主								
469	土屋市兵衛	中士 番士(書院番)	当主								
470	同 甚四郎	中士 番士(書院番)	469								
471	津田藤三郎	中士 番士(留守番)	458								
472	土屋五郎八	中士 番士(大番)	464								
473	土屋五郎八	中士 新番	当主								
474	根来左太夫	中士 番士(書院番)	当主		高			飯			
475	同 祐蔵	中士 番士(書院番)	474	中	高						
476	中根鞆負	上士 寄合席	当主	荒		坂			津	馬	●
477	中村平太夫	中士 番士(留守番)	当主	村2			市				
478	永見志馬	上士 寄合席	当主					落			
479	中川十六夫	上士 寄合席	485			出			長	馬	
480	中根新左衛門	中士 役番外	当主	荒2	高				津		
481	同 喜三太	中士 役番外	480	荒	高						
482	奈良勝之助	中士 番士(大番)	当主	明				萩			
483	中山權九郎	中士 番士(大番)	501				市	飯			
484	中村庄左衛門	中士 番士(留守番)	当主	村2				寸		馬	
485	中川主膳	上士 寄合席	当主			出				馬	
486	中村久蔵	中士 役番外	当主		高					馬	
487	中村伸	中士 番士(大番)	当主	慶						馬	
488	同 鉄之助	中士 番士(大番)	487	慶			市				
489	奈良助右衛門	中士 番士(大番)	当主	村					津		
490	中山増次	中士 番士(大番)	520	山				伊			
491	中野平太郎	中士 番士(大番)	当主		鱈						
492	中山太郎左衛門	中士 番士(大番)	当主	明							
493	中川平太左衛門	中士 番士(大番)	当主			横					
494	中村捨八	中士 番士(留守番)	484			出					
495	内藤彦左衛門	中士 番士(留守番)	当主	井		出					
496	永見集人	上士 定座番外席	当主				久				
497	中山三郎助	中士 役番外	517					寸			
498	永井与五左衛門	中士 番士(書院番)	当主					伊			
499	成瀬幸吉	中士 番士(留守番)	当主		高						
500	奈良藤五郎	中士 番士(大番)	489				久				

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
401	竹内滝右衛門	中士 番士(大番)	当主	山	高						
402	滝沢元右衛門	中士 番士(留守番)	当主	村	高						
403	多田彦左衛門	中士 新番	当主	村		横2					
404	高久官太夫	中士 番士(留守番)	当主			出	久				
405	多郎長作	中士 番士(留守番)	当主	慶		坂			津		
406	高田作之丞	上士 寄合席	当主	392		出					
407	多賀谷孝次郎	中士 役番外	380	荒							
408	高村荒次郎	中士 役番外	当主					飯2			
409	高村長作	中士 役番外	当主					落			
410	武田藤三郎	中士 番士(書院番)	当主					吉			
411	武田平右衛門	中士 番士(書院番)	398					岡			
412	高野静之助	中士 番士(大番)	385				久				
413	武部勝之助	中士 番士(留守番)	当主					伊			
414	田辺奥右衛門	中士 番士[番士]	子弟	山							
415	竹内小作	中士 番士(大番)	当主	山				伊			
416	田口五太夫	中士 番士(留守番)	当主								
417	竹内真作	中士 番士(留守番)	当主					岡			
418	高須進五郎	中士 番士(大番)	389				市				
419	高尾半三郎	中士 番士(留守番)	当主								
420	竹内嘉蔵	中士 番士(留守番)	当主	山2					宇		
421	高木藤左衛門	中士 番士(留守番)	当主								
422	滝沢長十郎	中士 番士(留守番)	402	村							
423	多田久平太	中士 番士(留守番)	当主	山			市				
424	高松虎吉	中士 新番	403			横				馬	
425	多田松五郎	中士 新番	当主								
426	竹沢藤太夫	中士 番士(大番)	当主						ツ2		
427	竹沢太郎兵衛	中士 番士(大番)	当主								
428	高田安之丞	上士 寄合席	406								
429	多賀谷他助	上士 寄合席	392								
430	大道寺芳三郎	中士 役番外	当主								
431	高村大言	中士 役番外	409								
432	高間文四郎	中士 役番外	当主								
433	同 長太郎	中士 役番外	432								
434	高橋官蔵	中士 役番外	382								
435	弟 外言	中士 役番外	382								
436	高村岩次郎	中士 番士(書院番)	374								
437	高田新七郎	中士 番士(書院番)	当主								
438	田川清助	中士 番士(書院番)	当主								●
439	同 太郎	中士 番士(書院番)	438								
440	田辺藤次郎	中士 番士(大番)	当主								
441	高嶋小弥太郎	中士 番士(大番)	377								
442	竹内忠左衛門	中士 番士(大番)	当主								
443	多喜田藤内	中士 番士(大番)	当主								
444	高尾小金吾	中士 番士(大番)	当主								
445	武田雄吉	中士 番士(留守番)	420								
446	竹内熊蔵	中士 番士(留守番)	当主								
447	竹下文太夫	中士 番士(大番)	当主								
448	滝政吉	中士 番士(留守番)	当主								
449	竹沢藤五郎	中士 新番	426								
450	高橋素平	中士 新番	当主								



No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
551	上坂平八郎	中士 役番外									
552	宇佐美伸右衛門	中士 番士 (大番)	山					飯			●
553	内田作兵衛	中士 番士 (大番)	荒					伊			
554	同 四郎吉	中士 番士 (大番)						吉2			
555	宇目兵衛	中士 番士 (留守番)						吉			
556	野中重左衛門	中士 番士 (留守番)	中								
557	能勢角太夫	中士 新番									
558	野坂源右衛門	中士 番士 (書院番)									
559	野村助十郎	中士 役番外									
560	野治小兵衛	中士 役番外									
561	同 平八郎	中士 役番外									
562	野村直三郎	中士 番士 (大番)									
563	野村十六夫	中士 役番外									
564	野田喜平次	中士 番士 (書院番)									●
565	野村四郎左衛門	中士 番士 (大番)									
566	野村安右衛門	中士 番士 (大番)									
567	同 与三兵衛	中士 番士 (大番)									
568	野村治右衛門	中士 新番									
569	野村万太郎	下士 新番格									
570	野村此右衛門	下士 新番格									
571	同 若吉	下士 新番格									
572	熊谷弥門	上士 定座番外席									
573	国枝小兵衛	中士 番士 (留守番)									
574	久津見三内	中士 番士 (書院番)									
575	国枝藤兵衛	中士 番士 (大番)									
576	来栖半之丞	中士 番士 (留守番)									
577	国枝東吉	中士 番士 (留守番)									
578	久津見多忠	中士 番士 (書院番)									
579	久津見北兵衛	中士 番士 (書院番)									
580	黒沢源左衛門	中士 番士 (大番)									
581	弟 平八	中士 番士 (大番)									
582	久津見記十郎	中士 番士 (留守番)									
583	栗田八十郎	中士 番士 (留守番)									
584	桑山彦助	中士 番士 (小姓)									
585	栗原作兵衛	中士 番士 (留守番)									
586	久保一郎右衛門	中士 番士 (大番)									
587	同 三吉	中士 番士 (大番)									
588	同 与吉	中士 番士 (大番)									
589	来栖八百吉	中士 番士 (留守番)									
590	久世巖吉	中士 番士 (大番)									
591	久保忠太夫	中士 新番									
592	山口作助	中士 番士 (大番)									
593	山本信太郎	中士 役番外									
594	山田藤兵衛	中士 役番外									
595	梁兵右衛門	中士 番士 (書院番)									
596	山口孫三郎	中士 役番外									
597	矢嶋準作	中士 番士 (書院番)									
598	矢野市左衛門	中士 番士 (書院番)									
599	八木郡右衛門	中士 番士 (小姓)									
600	築田八太夫	中士 番士 (大番)									

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
501	中山藤右衛門	中士 番士 (大番)									
502	中村甚左衛門	中士 番士 (留守番)	山					飯			●
503	永田四郎兵衛	中士 番士 (大番)	荒					伊			
504	成瀬又五郎	中士 番士 (大番)									
505	中沢七兵衛	中士 番士 (留守番)						吉2			
506	同 甚兵衛	中士 番士 (留守番)						吉			
507	永田彦三郎	中士 番士 (留守番)	中								
508	中村久太夫	中士 役番外									
509	中村久之助	中士 新番									
510	中川小膳	上士 寄合席									
511	永見与吉	上士 寄合席									
512	永見嘉吉	上士 定座番外席									
513	中村宗兵衛	中士 役番外									
514	同 孫太郎	中士 役番外									
515	同 他次郎	中士 役番外									
516	中村藤次郎	中士 役番外									
517	中山仙右衛門	中士 番士 (大番)									
518	奈良藤太郎	中士 番士 (大番)									
519	中野啓助	中士 番士 (大番)									
520	中山半右衛門	中士 番士 (大番)									
521	長崎藤四郎	中士 番士 (大番)									
522	中田他三郎	中士 番士 (大番)									
523	同 久次郎	中士 番士 (大番)									
524	中山八次郎	中士 番士 (大番)									
525	中村仁右衛門	中士 番士 (留守番)									
526	高部源次郎	中士 番士 (留守番)									
527	中野文左衛門	中士 新番									
528	同 文次郎	中士 新番									
529	中川小平太	中士 [番士]									
530	中村市郎左衛門	中士 番士 (大番)									
531	村田竜之進	中士 役番外									
532	村田巳三郎	中士 役番外									
533	村上熊次郎	中士 役番外									
534	村上左伸	上士 定座番外席									
535	村上作右衛門	中士 役番外									
536	武曾金五郎	中士 役番外									
537	武曾權太夫	中士 番士 (留守番)									
538	村田理右衛門	中士 番士 (留守番)									
539	武曾増吉	中士 役番外									
540	上坂五郎助	中士 番士 (大番)									
541	上坂五右衛門	中士 番士 (大番)									
542	宇都宮長十郎	上士 寄合席									
543	宇都宮長十郎	中士 番士 (留守番)									
544	上坂藤太夫	中士 役番外									
545	浦井藤次郎	中士 番士 (留守番)									
546	上坂入郎左衛門	中士 番士 (大番)									
547	内田唯作	中士 番士 (大番)									
548	宇都宮綱太郎	上士 寄合席									
549	同 辰五郎	上士 寄合席									
550	同 慎之助	上士 寄合席									

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
651	松江三郎右衛門	中士 番士(大番) 当主	慶				久				
652	松原次郎左衛門	中士 番士(大番) 当主	慶				市				
653	牧野小太郎	中士 番士(留守番) 当主	慶				市				
654	松村市兵衛	中士 新番 当主	慶	井							
655	松尾新太郎	中士 番士(留守番) 646	中				久				
656	前波忠兵衛	中士 役番外 当主	中								
657	同 常之丞	中士 役番外 656	中								
658	松原信太郎	中士 番士(書院番) 648									
659	松原四郎兵衛	中士 番士(書院番) 当主									
660	真杉五太夫	中士 番士(大番) 当主					久				
661	松原鉄吉	中士 番士(大番) 652					坂				
662	松村久右衛門	中士 番士(大番) 当主					2				
663	松井惣一郎	中士 新番 当主									
664	前田彦次郎	中士 番士(大番) 当主									馬
665	松平源太夫	上士 寄合席 当主									
666	同 多門	上士 寄合席 665									
667	松尾源左衛門	中士 役番外 当主									
668	松永与三之助	中士 役番外 642									
669	松波敏太郎	中士 番士(書院番) 643									
670	真杉喜六	中士 番士(大番) 660									
671	松山理左衛門	中士 番士(大番) 当主									
672	松沢勘十郎	中士 番士(留守番) 当主									
673	牧野左次兵衛	中士 番士(大番) 当主									
674	同 金太郎	中士 番士(大番) 673									
675	松原外次郎	中士 番士(大番) 当主									
676	松山清五郎	中士 番士(留守番) 当主									
677	牧山和太郎	中士 番士(留守番) 当主									
678	劍持弥作	中士 番士(大番) 当主	荒2								
679	怪 久太郎	中士 番士(大番) 678									
680	福田甚三郎	中士 番士(大番) 当主	村	明			市				
681	福嶋森之進	中士 番士(大番) 当主		明							
682	福嶋忠右衛門	中士 番士(留守番) 当主									津
683	藤井久左衛門	中士 新番 当主									ソ
684	福嶋忠兵衛	中士 番士(留守番) 682									
685	藤井喜兵衛	中士 番士(大番) 当主	荒								
686	同 清太郎	中士 番士(大番) 685	荒								
687	藤間熊藏	中士 番士(留守番) 当主	慶								
688	古市八兵衛	中士 新番 当主									
689	藤田新左衛門	中士 番士(大番) 当主									
690	藤井文五郎	中士 番士(大番) 681									
691	藤井文五郎	中士 新番 683									
692	狹主税介	上士 高知席 693		明							
693	狹木工	上士 高知席 当主		明							馬
694	狹帶刀	上士 高知席 当主		明							馬
695	同 伸	上士 高知席 694									馬
696	小宮山周藏	中士 役番外 696	中								馬
697	同 伝太郎	中士 番士(書院番) 当主	中								津
698	小林又右衛門	中士 番士(書院番) 当主	荒								津
699	小六郎兵衛	中士 番士(書院番) 当主	荒								
700	橋本集之助	中士 番士(大番) 706					久				馬

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
601	安原塔五郎	中士 番士(留守番) 当主	村2	明							
602	山本源左衛門	中士 役番外 当主	村2								
603	山野十太夫	中士 役番外 619					市				馬
604	山口与右衛門	中士 役番外 当主					市				
605	矢野虎太	中士 番士(書院番) 598									
606	安川幸助	中士 番士(書院番) 当主	中								
607	山形熊之助	中士 番士(小姓) 当主		明							
608	山崎宗左衛門	中士 番士(大番) 当主									
609	山口新右衛門	中士 番士(大番) 当主									
610	山口政八郎	中士 番士(大番) 当主	荒								
611	矢野権平	中士 番士(大番) 当主					市				
612	安本新助	中士 番士(大番) 当主					市2				
613	山本彦助	中士 番士(小姓) 当主	慶								
614	山田吉左衛門	中士 番士(大番) 当主	慶				坂				
615	山田六兵衛	中士 番士(留守番) 当主	慶								
616	山田金五兵衛	中士 番士(留守番) 当主									
617	山川登弥太	上士 高家 当主									
618	山本猶次郎	中士 [番士] 子弟 当主					久				
619	山本十兵衛	中士 役番外 当主	慶								
620	矢嶋七郎右衛門	中士 番士(書院番) 当主	村								
621	山田次郎太夫	中士 番士(大番) 当主									長
622	柳下久之丞	中士 番士(大番) 当主					市				
623	山本健藏	中士 番士(小姓) 613									
624	山路辰五郎	中士 新番 当主					久				
625	山口藤助	中士 番士(大番) 640									
626	山田小五郎	中士 役番外 594	慶								
627	山本清右衛門	中士 役番外 当主									
628	同 源八	中士 役番外 627									
629	同 駒藏	中士 役番外 627									
630	梁十次郎	中士 番士(書院番) 595									
631	矢嶋忠助	中士 番士(書院番) 620									
632	同 徹之助	中士 番士(書院番) 620									
633	安川弥吉	中士 番士(書院番) 606									
634	山崎三吉	中士 番士(大番) 608									
635	山田定右衛門	中士 番士(大番) 当主									
636	山田重治	中士 番士(留守番) 当主									
637	山田与三吉	中士 番士(留守番) 615									
638	山田隆九郎	中士 番士(留守番) 616									
639	山田茂兵衛	中士 新番 当主									
640	山口半右衛門	中士 番士(大番) 当主									
641	松平庄兵衛	上士 高知席 当主	中	明			出				馬
642	松永次郎左衛門	中士 役番外 当主	井								馬
643	松波甚左衛門	中士 番士(書院番) 当主	中2	明2							▲
644	前波彦三郎	中士 番士(大番) 当主	中								
645	真杉小平次	中士 番士(留守番) 当主	中2				横				馬
646	松尾伝藏	中士 番士(留守番) 当主	中								長2
647	牧野主殿介	上士 寄合席 当主	中2	井							津
648	松原権左衛門	中士 役番外 当主	中								津
649	松田新四郎	中士 番士(大番) 当主	中				坂				
650	松原兵之助	中士 番士(留守番) 当主	中				市				

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
751	浅見伸右衛門	中士 番士(大番)						落			
752	厚治文助	中士 番士(留守番)						伊			
753	弟 鉄吉	中士 番士(留守番)						伊			
754	弟 与三次郎	中士 番士(留守番)						伊			
755	青山弥五右衛門	中士 番士(留守番)						伊			
756	同 小三郎	中士 番士(留守番)									
757	有沢勘助	中士 番士(大番)									
758	跡部又藏	中士 番士(留守番)									
759	有賀清右衛門	中士 番士(留守番)						萩			
760	秋田左太夫	中士 番士(留守番)									
761	同 寅太郎	中士 番士(留守番)						市			
762	安藤久藏	中士 新番						久			
763	赤尾久太夫	下士 新番格									
764	明石健吉	上士 高知席									
765	雨森謙太郎	上士 寄合席									
766	雨森謙太郎	上士 寄合席									
767	同 三次郎	上士 寄合席									
768	雨森儀右衛門	中士 役番外									
769	同 庄九郎	中士 役番外									
770	秋田三五左衛門	中士 役番外									
771	同 城太郎	中士 役番外									
772	浅井弁之助	中士 役番外									
773	青木与一右衛門	中士 役番外									
774	同 作藏	中士 役番外									
775	安陪清兵衛	中士 番士(書院番)									
776	相沢八郎右衛門	中士 番士(小姓)									
777	相沢唯之助	中士 番士(小姓)									
778	浅見徳太郎	中士 番士(大番)									
779	青山茂四郎	中士 番士(留守番)									
780	青山与兵衛	下士 新番格									
781	同 三次郎	下士 新番格									
782	笹治右近	上士 高知席									
783	酒井小隼人	上士 高知席									
784	笹川藤内	中士 番士(小姓)									
785	酒井十之丞	中士 寄合席									
786	佐々木小左衛門	中士 役番外									
787	沢木又八	中士 役番外									
788	榎原仁右衛門	中士 番士(留守番)									
789	相馬孫六	上士 寄合席									
790	笹治大次	上士 高知席									
791	徳治権右衛門	上士 寄合席									
792	斎藤喜五郎	上士 寄合席									
793	沢木八右衛門	中士 役番外									
794	沢田又右衛門	中士 番士(大番)									
795	斎藤門太夫	中士 番士(大番)									
796	坂部多曾右衛門	中士 番士(大番)									
797	笹木七左衛門	中士 新番									
798	相馬一九郎	上士 寄合席									
799	酒井外記	上士 高知席									
800	桜井鉄吉	中士 役番外									

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
701	近藤十兵衛	中士 番士(留守番)						落			
702	近藤次右衛門	中士 番士(留守番)						吉			
703	小堀藤太郎	中士 番士(留守番)						久2			
704	古石作之助	中士 番士(留守番)						吉			
705	小石左平次	中士 番士(書院番)						萩			
706	権太権太夫	中士 番士(大番)						久2			
707	小林八郎助	中士 番士(大番)									
708	弟 鉄五郎	中士 番士(留守番)									
709	小堀伝右衛門	中士 番士(留守番)						久2			
710	近藤雄藏	中士 役番外									
711	小水軒八郎	中士 番士(留守番)									
712	江口源太郎	上士 定座番外席						飯			
713	弟 半吉	上士 定座番外席						飯			
714	榎並佐次右衛門	中士 番士(留守番)									
715	同 熊太郎	中士 番士(留守番)									
716	寺木十右衛門	中士 番士(留守番)						萩			
717	寺沢藤左衛門	中士 番士(大番)						萩			
718	同 八郎	中士 番士(大番)									
719	芦田内匠	上士 高知席						落2			
720	有賀此面	上士 高知席						市			
721	有賀内記	上士 高知席						吉2			
722	天方弁之助	上士 寄合席									
723	荒川十右衛門	上士 寄合席									
724	滝美直記	上士 定座番外席						飯			
725	青木雄藏	中士 番士(大番)									
726	天方孫八	上士 寄合席						岡			
727	浅井小三郎	中士 役番外									
728	浅井八郎	中士 番士(書院番)									
729	荒川三郎太夫	中士 番士(留守番)									
730	秋田水門	上士 寄合席						落			
731	雨森伝左衛門	上士 寄合席						吉			
732	秋田孫太郎	中士 役番外						飯			
733	浅見七十郎	中士 役番外						落			
734	味岡甚左衛門	中士 番士(大番)						市			
735	同 孫九郎	中士 番士(大番)						市			
736	同 三次郎	中士 番士(大番)						市			
737	同 捨藏	中士 番士(大番)						市			
738	雨森彦左衛門	中士 番士(大番)									
739	芦田十右衛門	中士 番士(大番)									
740	瀧美佐太郎	中士 番士(留守番)						落			
741	荒川蘭平	中士 番士(留守番)									
742	有賀忠兵衛	中士 番士(大番)									
743	青木一右衛門	中士 番士(大番)									
744	荒川八十郎	上士 寄合席						岡2			
745	雨森甚四郎	中士 役番外						久			
746	青木与一郎	中士 番士(大番)						市			
747	安陪百次郎	中士 番士(書院番)						岡			
748	雨森藤四郎	中士 番士(小姓)									
749	跡部幸八郎	中士 番士(小姓)						吉			
750	浅見忠右衛門	中士 番士(大番)						落			

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
851	木内源太郎	中士 番士(大番)	843 当主								
852	湯俣藤兵衛	中士 番士(大番)	当主	慶							
853	毛受伝三郎	中士 寄合席	当主	中					津2	馬	
854	同 鹿之助	中士 寄合席	853 当主	明	高						
855	水野幸右衛門	中士 番士(留守番)	当主	慶2		坂		岡	ツ2		
856	水戸但馬	上士 高家	当主	村		横		中	長		
857	皆川左門	上士 寄合席	871 当主	明				吉	長	馬	
858	三好久左衛門	中士 新番	当主	慶	高				ソ		
859	水谷織部	上士 寄合席	当主	中				吉			
860	美濃部金弥	上士 定座番外席	864 当主	井	高			飯			
861	三岡次郎大夫	中士 番士(書院番)	当主	井		出		伊	長		
862	三浦左衛門	中士 番士(大番)	当主		高			落		馬	
863	水谷乙吉	上士 寄合席	859 当主	中		出		吉			
864	美濃部半七	上士 定座番外席	当主					飯			
865	溝口郷右衛門	中士 番士(書院番)	当主		高		市				
866	三岡助右衛門	中士 番士(書院番)	当主		鰐					馬	
867	三寺剛右衛門	中士 番士(小姓)	当主	村			久				
868	三上孫大夫	中士 番士(大番)	当主			出		伊			
869	水野五郎八	中士 番士(大番)	当主	井				落			
870	三沢万吉	中士 番士(留守番)	子弟	慶		坂				馬	
871	皆川多左衛門	上士 寄合席	当主								
872	同 謙之助	中士 寄合席	871 当主					吉			
873	皆川善兵衛	中士 番士(大番)	当主					落			
874	水野荒次郎	中士 番士(大番)	当主	山							
875	皆崎次右衛門	中士 番士(留守番)	当主			横					
876	同 鉄太郎	中士 番士(留守番)	875 当主	中							
877	皆川平右衛門	中士 番士(大番)	当主	荒							
878	水野新之助	中士 番士(留守番)	855 当主			坂					
879	水野清兵衛	中士 新番	当主				市				
880	水戸他作	上士 高家	856 当主								
881	水谷五三郎	上士 寄合席	859 当主								
882	皆川金馬	上士 寄合席	871 当主								
883	水野主計	上士 寄合席	当主								
884	同 数馬	上士 寄合席	883 当主								
885	宮北權六	中士 役番外	当主								
886	同 多賀次郎	中士 役番外	885 当主								
887	三岡石五郎	中士 番士(書院番)	861 当主								
888	溝口兵三郎	中士 番士(書院番)	865 当主								
889	三上孫吉	中士 番士(大番)	868 当主								
890	室下平四郎	中士 番士(大番)	当主								
891	三沢左助	中士 番士(留守番)	当主								
892	同 勘助	中士 番士(留守番)	891 当主								
893	宮塚又兵衛	中士 番士(留守番)	当主								
894	同 登門	中士 番士(留守番)	893 当主								
895	水野鉄平	中士 新番	879 当主								
896	皆川平太郎	中士 番士(大番)	877 当主								
897	浅谷權左衛門	上士 寄合席	当主	荒2		坂2				馬	
898	嶋田清左衛門	上士 寄合席	当主	荒				飯	津		
899	嶋田七十郎	上士 寄合席	898 当主	中	高			飯			
900	四王天又兵衛	中士 番士(留守番)	当主			横	市			馬	

No.	姓名	家格・身分	鎮衛	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
801	真田五郎兵衛	中士 番士(書院番)	当主	明							
802	坂田忠藏	中士 番士(大番)	当主	井				落	津		
803	佐野雄藏	中士 番士(大番)	荒2 当主			横					
804	笹倉石内	中士 番士(大番)	当主			坂		吉2		馬	
805	斎藤文吉	中士 番士[番士]	子弟				久				
806	佐久土市兵衛	中士 番士(大番)	当主	中			市				
807	弟 九八郎	中士 番士(大番)	806 当主				市				
808	斎木佐次右衛門	中士 番士(大番)	当主	慶				岡			
809	桜井定右衛門	中士 番士(大番)	当主			横		飯			
810	沢田弥三郎	中士 番士(留守番)	当主	山				伊			
811	酒井左源太	中士 番士(大番)	当主				市			馬	
812	坂部佐太郎	中士 番士(大番)	796 当主	村							
813	同 勲十郎	中士 番士(大番)	当主					落			
814	酒井金兵衛	中士 番士(留守番)	当主	中				伊			
815	坂本平兵衛	中士 番士(留守番)	当主	中				中			
816	同 佐之助	中士 番士(留守番)	815 当主	中				中			
817	坂井又三郎	中士 番士(書院番)	当主			出2			年2		▲
818	同 重太郎	中士 番士(書院番)	817 当主			出			宇		
819	佐野内藤	上士 寄合席	当主							馬	
820	梅原十郎大夫	中士 役番外	当主	中							
821	梅原孫兵衛	中士 番士(大番)	当主				市				
822	同 忠太郎	中士 番士(大番)	821 当主				市				
823	沢田豊作	中士 番士(大番)	794 当主	山							
824	坂野四郎兵衛	中士 番士(大番)	当主								
825	坂井半十郎	中士 番士(大番)	当主				久			馬	
826	沢木林左衛門	中士 番士(大番)	当主								
827	梅原茂三郎	中士 番士(留守番)	788 当主			横					
828	佐々木惣四郎	中士 新番	当主	村							
829	酒井波門	上士 高知席	当主								
830	桜井庄九郎	中士 役番外	当主								
831	梅原小太郎	中士 役番外	820 当主								
832	佐野金吉	中士 番士(大番)	803 当主								
833	笹川庄八	中士 番士(留守番)	当主								
834	桜井興作	中士 番士(大番)	809 当主								
835	同 捨言	中士 役番外	830 当主								
836	坂野銀吉	中士 番士(大番)	824 当主								
837	才川外三郎	中士 新番	当主								
838	坂井安大夫	下士 新番格	当主								
839	同 栞三郎	下士 新番格	838 当主								
840	佐野内泰太郎	中士 番士(留守番)	当主								
841	木内甚太郎	中士 番士(留守番)	844 当主	村							
842	喜多嶋能藏	中士 新番	845 当主	村		横		飯	ソ		
843	木内与次兵衛	中士 番士(大番)	当主	山2							
844	木内甚兵衛	中士 番士(留守番)	当主			出					
845	喜多嶋孫次夫	中士 新番	当主	慶		坂		飯2			
846	岸田藤次	中士 番士(留守番)	当主								
847	北川市郎	上士 寄合席	当主				市				
848	木村二十郎	中士 番士(留守番)	当主								
849	木村清右衛門	中士 番士(大番)	当主								
850	木村豊吉	中士 番士	849 当主								

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
951	同 弥三郎	中士 役番外	中	明				サ			
952	瀬尾権八	中士 番士(書院番)	当主	村2		出	横		字		
953	殊尾平八	中士 番士(留守番)	当主	中						馬	
954	関幸左衛門	中士 番士(留守番)	当主	慶					ッ		
955	仙石右衛門	上士 寄合席	当主	井2		出					
956	仙石喜左衛門	中士 番士(大番)	当主			坂					
957	関恒三郎	中士 新番	954							津	
958	関忠夫	中士 番士(大番)	当主								
959	仙石竹三郎	中士 番士[番士]	子弟								
960	同 虎熊	上士 寄合席	955								
961	瀬尾利吉	中士 番士(書院番)	952								
962	仙石万次郎	中士 番士(大番)	956								
963	関誠吉	中士 番士(大番)	958								
964	杉浦幸右衛門	中士 番士(大番)	当主	荒				吉2	津・西	馬	
965	菅沼平兵衛	上士 番士(大番)	当主	慶		横	市2			馬	
966	鈴木主税	上士 定座番外席	当主	井2		鰐		サ	津	馬	
967	菅沼作平	中士 新番	当主	慶		高			ッ2		
968	杉田五郎兵衛	上士 高知席	当主	井				岡		馬	
969	数山仁次夫	中士 役番外	当主			出2				馬	
970	数山彦右衛門	中士 番士(大番)	当主	慶					ッ2		
971	杉田五次夫	中士 役番外	当主					サ			
972	鈴木作太夫	中士 番士(大番)	当主	慶2				岡			
973	鈴木牛兵衛	中士 番士(大番)	当主			出					
974	鈴木藤吉	中士 番士(留守番)	当主					サ			
975	末松嘉十郎	中士 新番	983	慶				久			
976	菅沼与一郎	上士 寄合席	984	井				久			
977	菅沼主水	上士 定座番外席	当主		鰐2						
978	周防長兵衛	中士 役番外	当主	井							
979	鱧長右衛門	中士 番士(小姓)	当主					久			
980	鈴木百助	中士 番士(大番)	当主								
981	鈴木右衛門	中士 番士(留守番)	当主	中				飯			
982	鈴木丹藏	中士 番士(留守番)	当主			坂					
983	末松覚兵衛	中士 新番	当主						ッ		
984	菅沼市左衛門	上士 寄合席	当主								
985	菅沼直衛	上士 定座番外席	977								
986	周防平吉	中士 役番外	978								
987	鈴木音助	中士 [番士]	子弟								
988	杉田七之助	中士 役番外	971								
989	鈴木平馬	中士 役番外	当主								
990	同 鑑太郎	中士 役番外	989								
991	鈴木虎市	中士 [番士]	子弟								
992	鈴木定八	中士 番士(大番)	972								
993	鈴木又三郎	中士 番士(大番)	当主					吉			
994	須崎鷲助	中士 番士(大番)	当主								
995	鈴木政太郎	中士 番士(留守番)	974					伊			
996	鈴木小弥太	中士 番士(留守番)	982								
997	菅沼定次郎	中士 新番	967								
998	西尾源次左衛門	中士 役番外	当主	荒2				サ	津2	馬	師
999	同 十之丞	中士 役番外	998					サ	津		師
1000	横山藤八郎	中士 番士(留守番)	御子弟	中	井2						

No.	姓名	家格・身分	鎗術	兵学	居合	剣術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
901	嶋田政之丞	上士	898	中				飯			
902	白石十郎助	上士 定座番外席	当主	荒2							
903	下山彦三	中士 番士(大番)	当主	村2		出				馬	
904	嶋津右太夫	中士 番士(留守番)	当主					萩			
905	下河三右衛門	中士 役番外	当主								
906	同 三之助	中士 役番外	905				市				
907	嶋津庄右衛門	中士 番士(大番)	当主					岡			
908	下山五郎左衛門	中士 番士(大番)	919				久				
909	嶋津左伝太	中士 番士(留守番)	904	村							
910	渋谷与五左衛門	中士 番士(留守番)	当主				久2				
911	嶋崎小兵衛	中士 新番	当主			坂					
912	嶋田九郎左衛門	中士 新番	当主	慶							
913	白崎甚兵衛	中士 新番	当主								
914	嶋崎伝右衛門	中士 番士(留守番)	当主					岡			
915	渋谷弥兵衛	上士 寄合席	897								
916	嶋川源右衛門	中士 番士(書院番)	当主								
917	同 久三郎	中士 番士(書院番)	916								
918	嶋津徳次郎	中士 番士(大番)	907								
919	下山半左衛門	中士 番士(大番)	当主								
920	渋谷定次郎	中士 番士(留守番)	910								
921	平本作野右衛門	上士 寄合席	当主					吉2		馬	
922	平田幾郎右衛門	中士 番士(大番)	当主			出		伊2		馬	
923	平瀬彦八	上士 新番	当主	山			市				
924	平本彦八	上士 寄合席	921			横					
925	広部七兵衛	中士 番士(留守番)	当主	荒							
926	久野八三郎	中士 番士(大番)	935	村		横			ッ		
927	久野文四郎	中士 番士(大番)	当主	村							
928	一柳献助	中士 番士(留守番)	当主			出					
929	平瀬長三郎	中士 番士(留守番)	当主	村			市				
930	樋口豊左衛門	中士 役番外	当主					岡			
931	比企五郎左衛門	中士 番士(小姓)	当主					萩			
932	平尾新五兵衛	中士 番士(大番)	当主					落			
933	平岡金左衛門	中士 番士(大番)	当主				市				
934	樋口安助	中士 番士(大番)	当主				久				
935	久野孫右衛門	中士 番士(大番)	当主					岡			
936	日比彦之丞	中士 役番外	当主						字		
937	彦坂又五郎	中士 番士(小姓)	927								
938	久野駒吉	中士 番士(留守番)	928								
939	一柳敬助	中士 番士(留守番)	当主								
940	東新十郎	中士 番士(留守番)	当主								
941	平井献助	中士 番士(留守番)	当主								
942	森田安兵衛	中士 番士(大番)	当主	荒		高				馬	
943	毛利政右衛門	中士 番士(大番)	当主	荒2				吉			
944	茂呂平三郎	中士 番士(大番)	当主	山							
945	本鏡十太夫	中士 番士(大番)	当主					伊			
946	望月万三郎	中士 番士(大番)	当主								
947	毛利小三郎	中士 番士(大番)	943								
948	本鏡三作	中士 番士(大番)	945								
949	仙石藤之丞	上士 寄合席	955			高		岡2			
950	平本藤左衛門	中士 役番外	当主	荒2	明2	高		サ			

No.	姓名	家格・身分	職階	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
1052	杉田清左衛門	下士 与力(有賀内記) 当主						萩	ッ		
1053	堀彦四郎	下士 与力(有賀内記) 当主	慶					岡			
1054	荒川市郎右衛門	下士 与力(有賀内記) 当主	慶			坂2			ッ		
1055	兒玉平兵衛	下士 与力(有賀内記) 当主		明							
1056	徳山三左衛門	下士 与力(有賀内記) 当主			高						
1057	村山加太郎	下士 与力(有賀内記) 当主			高						
1058	中村勘太夫	下士 与力(有賀内記) 当主									
1059	永井宗左衛門	下士 与力(有賀内記) 当主				坂					
1060	赤尾金平	下士 与力(有賀内記) 763 当主	慶						ッ		
1061	中山十兵衛	下士 与力(有賀内記) 当主					市				
1062	真木又左衛門	下士 与力(有賀内記) 当主	慶					萩			
1063	柴田忠藏	下士 与力(有賀内記) 当主	慶								
1064	竹下又太郎	下士 与力(有賀内記) 447 当主	慶			鰐					
1065	福嶋喜作	下士 与力(有賀内記) 当主	慶								
1066	伊藤十太夫	下士 与力(有賀内記) 当主	慶					岡			
1067	荒川喜代太	下士 与力(有賀内記) 当主				坂					
1068	水野清次郎	下士 与力(有賀内記) 当主				坂					
1069	吉江尊太郎	下士 与力(有賀内記) 当主				坂					
1070	江上音之助	下士 与力(有賀内記) 当主			高						
1071	矢野九兵衛	下士 与力(有賀内記) 当主	慶								
1072	久連松助藏	下士 与力(有賀内記) 579 当主	慶								
1073	古市伝太郎	下士 与力(有賀内記) 688 当主	慶					岡			
1074	成田逸平	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶								
1075	成田半五郎	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶			横					
1076	和田茂右衛門	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶								
1077	和田敬之助	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶					吉2			
1078	大井祐八郎	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶					吉			
1079	溝江外吉	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶			坂					
1080	林辰之丞	陪臣 本多内蔵助家来 当主	慶			坂					
1081	水戸守庄右衛門	陪臣 狛木工家来 当主	慶								
1082	秋山七左衛門	陪臣 狛木工家来 当主	慶					落			
1083	屋部助右衛門	陪臣 狛木工家来 当主	慶					落			
1084	藤井久右衛門	陪臣 狛木工家来 当主	慶					岡			
1085	加藤太兵衛	陪臣 菅治大学家来 当主	慶								馬
1086	福岡八郎右衛門	陪臣 本多隆家来 当主	慶			横					宇2
1087	山内竜之助	陪臣 松平庄兵衛家来 当主	慶								
1088	天野篤右衛門	陪臣 本多隆家来 当主	慶								
1089	加藤清兵衛	陪臣 本多隆家来 当主	慶								
1090	吉田祐八	陪臣 酒井波門家来 当主	慶								
1091	菅野次兵衛	陪臣 酒井波門家来 当主	慶								馬
1092	岩井弥右衛門	陪臣 有賀内記家来 当主	慶								
1093	木村重太夫	陪臣 有賀内記家来 当主	慶					岡			
1094	金河八郎右衛門	陪臣 有賀内記家来 当主	慶					岡			
1095	木村原藏	陪臣 有賀内記家来 当主	慶								馬
1096	相谷弥右衛門	陪臣 有賀内記家来 当主	慶								馬
1097	山崎百助	陪臣 酒井外記家来 当主	慶								馬
1098	難波渡右衛門	陪臣 戸田内匠家来 当主	慶					久			
1099	吉田次郎右衛門	陪臣 稲葉小四郎家来 当主	慶					落			
1100	吉田七次夫	陪臣 稲葉小四郎家来 当主	慶					萩			
1101	石黒佐次右衛門	陪臣 石黒佐次家来 当主	慶								馬
1102	賀藤専兵衛	陪臣 菅治藤石衛門家来 当主	慶					久			

No.	姓名	家格・身分	職階	兵学	居合	劍術	柔術	弓術	砲術	馬術	ほか
1001	村田新八	中士 番士(大番) 当主									師
1002	山田安之丞	中士 番士(大番) 師子弟	慶								師
1003	高島鏞之助	中士 番士(書院番) 師子弟	慶			横					師
1004	鱒淵喜太郎	中士 役番外 師子弟		明							師
1005	伊藤助十郎	中士 番士(大番) 当主			高						師
1006	落合文右衛門	中士 番士(留守番) 当主			高						師
1007	真谷川彦六	中士 番士(大番) 師子弟									師
1008	宇都宮五郎助	中士 番士(大番) 当主				出	市				師
1009	關平太夫	中士 番士(大番) 当主	中								師
1010	奥山助右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶			坂		岡			
1011	塚谷六右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶			坂					
1012	粹 四郎作	下士 与力(船木工) 1011 当主	慶			坂					
1013	丹羽十兵衛	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1014	佐藤五作	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1015	吉江惣左衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶2					岡			
1016	伊藤彦八	下士 与力(船木工) 当主	慶2								
1017	湯浅甚左衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶						津		
1018	嶋瀬東右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1019	梶川清助	下士 与力(船木工) 当主	慶					萩			
1020	磯松幸助	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1021	畑又左衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡2	ッ		
1022	粹 小三郎	下士 与力(船木工) 1021 当主	慶					岡			
1023	屋代二百平	下士 与力(船木工) 当主	慶			坂					
1024	養子 佐之助	下士 与力(船木工) 1023 当主	慶			坂					
1025	松浦徳七	下士 与力(船木工) 当主	慶				久				
1026	森藤十郎	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1027	養子 新八	下士 与力(船木工) 1026 当主	慶								
1028	安井藤太夫	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡	ッ		
1029	岩崎孫右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1030	尾崎捨一	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1031	水間保介	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1032	依田鉄三郎	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1033	高橋多次郎	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1034	養江新左衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡2	ッ2		
1035	山田小十郎	下士 与力(船木工) 当主	慶			坂					
1036	吉田源八	下士 与力(船木工) 当主	慶			坂					
1037	松山市藏	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1038	屋代源五右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1039	依田官左衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1040	磯谷要右衛門	下士 与力(船木工) 当主	慶					岡			
1041	慶徳安太夫	下士 与力(船木工) 当主	慶								師
1042	寺本仲三郎	下士 与力(船木工) 当主	慶								
1043	名越小八郎	下士 与力(船木工) 当主	慶		高						
1044	岡田長兵衛	下士 与力(有賀内記) 当主		明							
1045	山岡与三右衛門	下士 与力(有賀内記) 当主									師
1046	次男 左太夫	下士 与力(有賀内記) 1045 当主	慶								
1047	成見七郎右衛門	下士 与力(有賀内記) 当主	慶								
1048	小嶋郷左衛門	下士 与力(有賀内記) 当主	慶					ッ			
1049	岩路彦太夫	下士 与力(有賀内記) 当主	慶			坂		サ			
1050	岩路彦太夫	下士 与力(有賀内記) 当主	慶2					岡2	ッ		
1051	粹 新太郎	下士 与力(有賀内記) 1050 当主	慶					岡			